
異世界からのお節介

日野望美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界からのお節介

【Nコード】

N05950

【作者名】

日野望美

【あらすじ】

いたみきよつ伊丹杏とみやたつお宮龍生は赤ん坊の頃からの幼馴染で御近所同士。中学生になった二人は想いをはぐくむ事約十三年にして、初めての愛の告白を無事に終えた瞬間、信じられない連中と遭遇した！

私としては初の！？ 全年齢対応作品！ です。
軽いキス以上の描写は出ませんから、よろしく！！

はじまりのはじまり・1

「おい、杏きょう、あれ、なんだ？」

「ええ？ ウソ、人が浮かんで、着地した」

宮龍生みやたつおと私わたし、伊丹杏いたみきょうは生まれた時からの御近所さんで幼馴染で、幼稚園から中学まで、ずっと一緒という関係。並みの親戚より互いの家族の事情もよくわかっている。どちらかがどちらかの家に上り込んで、食事を食べてきても全然不自然じゃない、そんな家族ぐるみのざつくばらんな付き合いだ。

ちなみに今居る場所は、関西の某所の公立中学校の校舎の屋上だ。

ウチの父も龍生の父も、大阪府内に本社のある世界的な某メーカーのエンジニアで同期入社しゅうごうにゅうしゃの親友同士。結構転勤も多いのだが、不思議な事に関西を離れて、九州に行っても四国に行っても中部でも関東でも、いつも互いの割り当てられる社宅の部屋はお隣さんか、真上か真下。社宅住まいばかりの母親同士ももう、姉妹同然の中だ。「鹿児島かごしまの社宅に居たときは、旦那達は特別なプロジェクトで全然家に戻ってこなかったから、互いの家で交代にご飯作って、毎日ホームパーティー状態だったわよね」なんて私の母は言う。

先週、宮さん一家にもウチより一週間遅れで辞令が出て、懐かしいこの大阪に戻ってきた。

ウチは空き家状態だった父方の祖父母の残した家に戻った。ウチの父も宮のおじさんもそれなりに出世したので、幼い頃住んでいた平社員用住居の倍の広さの重役会一步手前クラスの部屋の社宅に入れたのだが……。宮さん一家は社宅に入ったのにウチは社宅に入らなかった事を母はとても残念がっていた。でも、その社宅と今ウチ

の家族が住んでいる古い家とは徒歩五分程度の距離だ。

ともかく、先週、龍生と私は約半月ぶりになる「感激の再会」を果たし、そして告白し、つい先ほど初めてのキスを交わしたのだ。こうなってみると、寧ろ同じ社宅住まいではない方が何かと好都合なのかもしれない。

「ヤダ、龍生、何あの二人、宇宙人？ エスパー？」

「こっち来るよ。直接聞くしかなさそう」

「何あんた、そないに落ち着いてんねん？」

「だって、あの顔、杏に瓜二つじゃないか、眼が赤いけれど」

空中から突如現れ、中学校の屋上に着地した男女。一人は私に瓜二つな女の子。眼が赤い。地球の人類じゃない？ 魔界の魔物さん？ もう一人は金髪で緑の眼のイケメン。こっちは大人だと思う。ガイジンの年はようわからんけど。なんかニコニコしちゃって、こっちに来る！ な、なんやの？ あれ？

「お久しぶりって言っても、覚えてないよね、杏ちゃん」

赤い眼の瓜二つさんが、しゃべった。

「あ、あのう、どなた様ですか？ いきなり空中から現れてここに着地したように見えたんですが」

「通常の人類じゃないよね、お二人とも、宇宙人さん？ それにしては見た目がこっちの人は杏に似すぎだ」

「ダーリン、どう説明すれば良いでしょうか？」

「信じてもらえなくても、本当の事を言うしか無いでしょう」

この瓜二つさんがダーリンと呼ぶ金髪の男性は、えらく綺麗な日本語を話す。

「私の魂は、伊丹京子のものなの。そして、杏ちゃんと私は生まれ

てすぐに、魂を入れ替えたの」

京子ばあちゃんって人は、飛行機事故で死んじゃったんじゃないの？

「そう、伊丹京子の肉体は飛行機が墜落した時点で消滅したけれど、魂は異世界に呼ばれたの。そこで頑張ったから、自分の孫として生まれ変わることになったん成功したんだけどね」

「その異世界の神の都合で、魂と肉体を交換したんだよ、杏ちゃんとかこのフェリシアは」

何このイケメンさん、無駄に色っぽいんだけど。そんなもってそのフェリシア？ って瓜二つさんを抱き寄せる手つきが、無駄にエロいんだけど……

「ハハハ、僕ら夫婦になって結構経つんだよ。未だにというか、ますますラブラブだけどね」

「ラブラブじゃないと、使命と言うかお仕事というか、色々支障があるのよね」

どさくさに紛れて、チュッチュチュッチュ、キスしてる！で、魂が祖母ちゃん？ わけわかんない！

「異世界からの、馬鹿ツプルさんたちは、何の用？」

「龍生君もすっかり関係者なんだよ」

金髪のイケメンさんがニヤニヤしながら、やけにはっきり断言した。

「嘘やろ？」

龍生は迷惑そうな嫌そうな顔だ。当たり前だけど。

「龍生君と杏ちゃん、ファーストキス、おめでとう！」

「な、なぜそれを！」

「バツチリ見えていたし」

金髪イケメンはそう言いながら、またチュツチュしてる。羞恥心
てやつが、麻痺してるようだ。

「ど、どうして、ファーストだつて言い切るんだよ！」

龍生が半分ブチ切れながら、疑問を投げかける。私も、不思議に
思う。

「えつとねえ、私たち、他人の思考が読み取れるつて言うか」

「超能力が有ると言うか、そんなところだ。ここへもワープして来
たわけだし」

それにしても、この奇妙な人たちが何の目的でここにやって来た
のか……

「ああ、それはね、向こうの世界の都合で、君らには是非ともラブ
ラブになつてもらわなくっちゃ困るんだが」

「ちよつとばかり、手伝つてほしい事なんかも有つたりするんだけ
ど、今はまだ早いから良いわ」

ラブラブにならないと、困る？

この時は、その辺の事情が全然分からなかった。だが、事情を知
つてからは、異世界と自分たちを巡る因縁の深さにびっくりさせら
れたりするのだが、それはまた随分と後の話になる。

はじまりのはじまり・1（後書き）

現在アルファポリスの青春小説大賞が行われています
この作品で参加しております。

こちらから、黄色いバナーを押して飛んでいただき、
一票投じていただけると大変ありがたいです。

はじまりのはじまり・2

気がつけば俺はいつも杏（あけ）の姿を視線で追って居る。

俺達の付き合いは大阪府下のある町の保健所で、互いの母親が六ヶ月検診に俺と杏を連れて行ったことから始まっている。当時、杏の家族は祖父母が残した家に住んでいて、その家と俺の家族が住んでいた社宅は眼と鼻の先だった。

「保健所の待合室で順番を待っている間も、あんだ達、互いをじつと見てたのよ」

「それがきっかけで、私たちお互いに話を始めて、近所に住んでいるって分かって」

「互いの旦那が同じ大学の出身で職場も同じだってわかって」
「共通点が多くて、びっくりしたのよ」

どちらの家族も転勤が多かったが、どう言うわけか社宅内で割り当てられる住まいがすぐ隣が真上、真下と言う事の連続で、九州・中国・四国・中部・関東どこでも近所さんで、下手な親戚よりもよほど親密な関係が続けてきた。幼稚園や学校の休みで父親が居ない日の昼食は、大抵いつも一緒だった。夏休みなどは社宅の他の仲良しを巻き込んで、昼食は常にホームパーティー状態だった。

「社宅って狭いけれど、仲良しが居ると楽しいわよね」

「ご近所トラブルで大変なんて話も聞くけれど、私たちはラッキー
だわ」

母親同士も不思議なほど馬が合うらしい。互いの母親同士が「親兄弟よりも先に心配事の相談をする相手」「実の姉妹より近い関係」と言っている。そんな母親達は、どうやら俺と杏がくっついてしま

えば良いと昔から考えていたようで「杏ちゃんを大事に思うなら、中学生としての節度は弁えなさいよ」「二人が結婚してくれたら嬉しいとは思っているから、皆に祝福して貰えるように、軽はずみな事はしないでね」などと言う。

屋上で互いの気持ちを告白し合って、互いにとつてのファーストキスを交わした訳だが、実はここから先がまだまだ長いのだと俺は感じていた。

「キスどまりで、高校卒業までは我慢しなくちゃいけないんだろうな」

「いやだあ、龍生、エッチしたいの？」

「そりゃあ、したいけれど、杏が大事だから我慢するよ。だから、杏も用心しろよ」

「用心つて？」

「お前を狙ってる男どもに、油断するなよ。自分は婚約者が居るってはっきり言っておけ」

「これって、婚約なの？」

「俺としては婚約のキスのつもり。御了承頂けましたか」
「了承いたしました」

更にもう一度、キスをしようかと思つた瞬間、異様な人物に気がついたのであった。

杏と瓜二つの顔なのに、眼が赤い女の子が空中に浮いている。浮いている？ 眼が赤い？ 通常の地球の人類ならば有りえない。続けて姿を現した背の高い金髪で緑の眼の男が、その女の子の腰を抱きかかえている。この子は自分の物だって言う、激しい自己主張にも見える。

空中から現れた二人の言葉によれば、女の子はフェリシアと言い、その魂が杏のお祖母ちゃんの京子さんのものなのだと言う。しかも杏とは肉体と魂を交換してるのだそう。って、それ……

「そうなの。杏ちゃんはもともと、今ダーリンと私が暮らしている世界で生まれた子だったの」

そうそう、そのダーリン、名前はマークと言うらしい。俺の魂はこのマークって男の弟にあたる人間のものなんだそう。その「弟にあたる」って言う言い方に、何か引っかけかりを俺は強く感じたんだが、その勘は正しかった事が、随分と後になって明らかになるのだったが、この時は何がなにやらチンプンカンプンだった。

「（龍生君、君は前世の記憶は丸で無いのか？）」
な、なんだなんだ？ これは？

「（一種のテレパシーだ。君はそれなりに霊的な力の強かった人物の生まれ変わりだから、僕やフェリシアのこうした話しかけが理解できるんだな）」

「（その力って、杏には無いのか？）」

「（どうも目覚めてはいないようだ。杏ちゃんの魂はまっさらで穢れが無い。だが、未熟でもある。大きな可能性は感じられるけれどもな）」

お？ 俺、テレパシー使ってる？

「（使ってるな。とても初めてとは思えないスムーズさだ）」

「（で、こんな形で話しかけるって、杏には内緒の何事かが有るのか？）」

「（さすがだ。察しが良いぞ）」

金髪男は妻だと言う抱え込んだ赤い眼の少女に、キスを繰り返しながら、一瞬鋭い視線を俺に向けた。何と言うか裏表の多そうな、

油断のならないおっさんだ。腰つきはエロいし、無駄にイケメンで気に入らない。

「（気に入らなくても、色々と因縁が有ってね。それに、僕とフェリシアは君の恋路をがっちりサポートする事に決めただから、そんなに睨むなよ）」

「（がっちりサポート？ 変な手出しは無用にしてくれ）」

「（何、危険人物の接近を未然に排除する、双方の意思疎通を円滑にする、その程度だよ）」

「（肝心な部分は、あくまで龍生君と杏ちゃんの意味を最大限尊重するから、心配しないで）」

「（なあ、あんたは本当に杏のばあちゃんだったのか？）」

「（ええ、私の魂は伊丹京子であったものよ。まあ、その後色々有りすぎたけれど）」

こいつら、チュツチュツと色ボケ馬鹿ツプルを装いながら、あれこればかりごとを巡らせるなんて、おっそろしい連中だな。

「（そうだな、龍生君、君のお見立ては正しいかもな。君、前世より魂がバージョンアップしてるよ）」

「（結構色々と妨害を試みる人間が出てくるとは思っけれど、頑張っつてね。杏は私の孫なんだからちゃんと幸せにしてやってよ。そうじゃないと祟るわよ）」

大丈夫さ。俺は、絶対に杏を幸せにするために全力を尽くすよ。

そう思った瞬間、怪しい二人の姿は消えていた。

はじめりのはじめり・2 (後書き)

龍生の自称は基本的に「俺」です。一箇所訂正しました。すみませ
ん

はじまりのはじまり・3

「なあ、杏ちゃん、どないしたん？」

「べ、べつに、何も無いけど」

「ほんま？ てつきり、龍生君と……あかん、よういわんわ」

そう言ったきり、浜田美穂は先ほどから顔を赤らめてもじもじしている。そこへ龍生がやって来た。

「何してるんだよ。西洋便器の蓋^{ふた}」

浜田美穂にこんな不名誉なあだ名を付けたのは、美穂の祖父に当たる近所の寺の住職だ。

幼児の頃の美穂は頑固で、怒られてもめつたに泣かないで口を引き結び、黙っている、そんな子だったのだ。その様子が可愛げがなくて、しかも女として将来が聊か不安な器量だといった意味合いも込めて「西洋便器の蓋」などと言う喩えをしたらしいが、美穂が気の毒なのは、そのあだ名を檀家や近所の老人連中が広めてしまい、この地域の人間が皆知っていると云う状態で、すっかり定着してしまっただ事だろう。

「た、龍生！ あんたまで言う事ないでしょ？」

「でも、祖父さん、上手い事を言つと昔から感心してたんだ」

美穂は「龍生君のいけず」と叫んで、わっと泣きながら走り去った。

「別に、俺以外の男子も全員言ってるぜ、西洋便器の蓋って」

「美穂ちゃんは幼稚園の頃から、あんたが好きだったのよ。久しぶりに再会して、それなりに期待していたこともあったんでしょくに、

さっきの一言で、完全に粉碎したわね」

「俺はずっと杏一筋だ。美穂がたとえ絶世の美女だったとしても、付き合う気なんて無い」

「せやけど……」

「早めにはつきりさせた方が、良いんだよ。そう言う事は」

杏も龍生も、生まれてから幼稚園の卒園の約半年前までこの土地に居た。だから美穂も同じ幼稚園で過ごしたので、その頃の記憶が美化されて残っていてもおかしくは無い。更に、杏も龍生も小学二年生のほんの半年間だけ大阪に戻った事もあった。九州から関東までほぼ毎年のように引越して、落ち着かない小学校時代だったが、幼児の頃馴染んだ大阪に半年だけ戻ったあの、小学二年生の時期は、他の土地では感じない特別な地域への愛情を意識させもしたのだった。

美穂の祖父は「きかん気で何でもようできる」と言って、龍生がお気に入りだった。境内で虫取りをさせてくれと龍生に頼まれるといつも快く許可してくれた。先ほどのような美穂の顔つきに龍生は見覚えが有る。

あれは、小学二年生の夏休みの事だ。自由研究用に蝉の抜け殻を集めさせてもらいに、寺に行き、そのついでに本堂の縁側で住職から「お供えのお下がり」の菓子と麦茶を買って話をしていた。

「あんだ、杏ちゃんが好きなんか？」

「はい。大人になったら結婚します」

「ほおお、さよか。美穂はどないや？ 不細工やけど、気立てはええで」

「すみません。俺は杏以外、どんなにええ子でも目に入らんです」

「さよか、こら、言われてしもた。そう言うわけやから、美穂、あ

きらめえ」

そのとき初めて、美穂が柱の影から自分たちの方を見ていたことに気がついた。

あの時も美穂はさっきと同じように「龍生君のいけず」と言い放つと、泣きながら走り去ったのだった。

「俺、いけずで言うてるのと違います」

美穂に泣かれて、何かひどく自分がいけない事を言ったような気がして龍生は動転した。そして住職の顔を心配になつて見たものだったが、住職は何処かほろ苦い笑みを浮かべてこんな事を言った。

「わかつてるで。まあ、あれやな、あんたみたいにええ男は女難に注意やでえ」

「じよなん？」

女の所為で自分の人生が雁字搦めにされてしまつのが、女難らしい。

望まない女との因縁や、迷惑な好意の向けられ方は「もてる」などと言つてヤニ下がつていられるほど甘いものではない。だから、自分の好きな女がはつきり決まっているのなら、あれこれ他の女に振り回されないように気をつけないといけないのだ。先ほどのきつぱりした言い方は確かに美穂には辛いものだが、はつきりさせないで居るよりもずっと親切だ。

確か、あの時住職はそんな風に言つて、龍生自身大いに納得したので、以来杏以外の女の子に好意を必要以上向けられないように注意するようになった。予想外の子から告白などされた場合は、平謝りでお断りするのだった。

「美穂の奴、あいつを好きな良い男が居るじゃないか」
「ええ？ ひよつとして、弘樹君」

たなへひろき
田辺弘樹は神社の息子だ。確かに龍生ほど人目を引く派手な顔ではないが、それなりに整った男らしい顔立ちで、最近は女子の間でも人気上昇中らしい。

美穂の父は地元の信用金庫の職員で、弘樹の父は私立高校の教師だ。どちらも転勤とは無縁で、幼いときからずっと一緒で、恐らくそれぞれの実家の関係もあって、この地元から遠くに行く可能性も低い。

「弘樹君、幼稚園の頃、美穂ちゃんの背中にトカゲを乗っけたり、コガネムシをくっつけたりしたでしょう？ あれ、美穂ちゃんにはトラウマみたいよ」

「でも、あれ、男の子が好きな女の子の気を引くために結構取りがちな行動なんだよ。さすがに、今はしないだろ？ あんな馬鹿なこ
と」

すでに、小学二年生の時には弘樹は美穂を影になり日向になり守っているように見えた。その後、龍生も杏も引越したから、弘樹と美穂に何が有ったのかは分からない。だが、そう言えば、今も彼だけが「西洋便器の蓋」と言わないのだ。その事に龍生は思い至った。幼稚園の頃はいじめっ子キャラだったが、小学生二年生の当時はめっきり静かになっていたし、中学になったら優等生路線を走り始めている。

「おとといさ、俺がこの町に帰ってきたのが心配だって、弘樹にはつきり言われた。でも、俺は相変わらず杏一筋だって言うと、安心したみたいだよ」

「へええ、美穂ちゃんのトラウマさえ克服できれば、未来は明るいかもねえ」

「美穂が『顔も頭もええ人がやつぱり一番やわ』と言っているから、弘樹は勉強頑張ってるんだと思う」

「なんか弘樹君がメチャメチャええ男に見えてきた」

「こら！ 杏、お前は俺だけ見ている」

「うん。今度のテスト、また満点連続でぶっちぎりのトップになつてね」

龍生はどこに引越しても学年トップの成績を取り続けてきたが、そのたびに杏が「龍生、かっこいい！」と言ってくれるのが、何よりの張り合いになっていた。

「任せとき！」

弘樹には悪いが、テストの成績は負けられないと龍生は思った。

みつしょん、かもしれない・1

浜田美穂の住んでいる寺と、田辺弘樹の住んでいる神社は明治以前は一つだったのだそうだ。

「はいぶつきしゃく 廃仏毀釈で分割された」

弘樹の説明を聞いて、龍生はフムフムとうなづいていた。

「えええつと、明治何年のことやったかいな？」

「龍生、言葉が大阪弁のようで、大阪弁ではないなあ。けつたいやで」

「じゃあないやん、日本中ウロウロして育つたさかい」

「無理せんでもええのんとちゃうか？」

「その件は、まあ、ええわ。で、はいぶつきしゃく、何年や？」

「慶応四年三月十三日に出た太政官布告と明治三年一月三日に出たみじのう詔やな」

「みことのり？」

「天皇陛下の御言葉」

「なんでそないなけつたいな言葉を使うのやろつな」

「知らんがな。なあ、龍生、お前が何で廃仏毀釈なんぞ、気にすんねん？」

「はいぶつきしゃくなんぞ、どうでもええねん。お前ん所と美穂ん所の寺が分けられた時のいきさつが知りたい」

「美穂の祖父さんに聞いたらどうなんや？」

「以前『神社と無理に分けた時、古い記録はみんな取り上げられた』つて聞いた覚えがある」

「僕の親父は社会科の教員で考古学マニアやけど、古文書は確か一切、祖父さんが死んですぐ、どっかの大学の先生に預けたみたいや。あ、親父」

弘樹が視線を向けた先には、弘樹によく似た顔の中年男が立っていた。現在この神社の宮司も兼任している弘樹の父・芳樹だ。龍生の記憶の中の芳樹は常にグレーのスーツに真っ白いカッター、黒いニットタイというスタイルなのだが、今日もそのままの服装だった。宮司と言うより、ダンディな紳士という感じだ。靴は相変わらずイギリスのメーカー・チャーチらしい。

「なんでオッチャンは、いつもそういうネクタイしてはるんですか？」

小学二年生の時、龍生はふと芳樹に尋ねたことがあった。自分の父親はニットタイを持っていないようだったので、珍しく感じたからだ。すると答は龍生の予想もしなかったものだった。

「オッチャン、ジェームズ・ボンドのファンやねん」

イアン・フレミングの小説の中のジェームズ・ボンドは、いつも黒の手編みのシルクのニットタイを結んでいるのだそうだ。簡単に手洗いでできるし、アイロンの必要も無いそうだ。本当はフォーマルなものではないが、色が黒いと、どんな場所でもさほど浮かないのも具合が良いらしい。

身長百八十三センチ、体重七十六キロという小説のボンドの設定通りの体格なのも、オッチャンの自慢だったはずだ。今見る限り、メタボにもならずそのままの体型を保っている。

「おじゃましてます」

龍生は腰かけていた縁側から立って、一礼した。

「ああ、龍生君か！ 久しぶりやな。大阪に戻ってきたんか」

「はい。父が本社勤務になりましたので」

「何ぞ、あつたんか？」

オツチャンはやはり、相変わらず鋭い、と龍生は感心した。

「（なあ、龍生君、あんたの隣にさつきからずっと白いおキツネ様が寄り添ってはるなあ）」

「（オツチャン、エスパーですか？）」

「（なんや知らんけど、昔からこんな具合や。龍生君も同類かいな）」

「（このおキツネ様、今朝がた俺の夢に出て来はったんですけれど、意思の疎通ができません）」

「（なら、待っていてや。急いで身を清めて着替えてから、おキツネ様を本殿におよびするわ）」

弘樹は龍生と父親が何やら互いに無言で見詰め合って、互いに何か心得顔になったのを、奇異に感じていた。

「なあ、親父と何を目と目で見交わして、二人の世界に入ってるん。男同士で胸糞悪い」

「アホか。弘樹には、おキツネ様、見えんのやな」

「なんやて？」

「朝からずっと、大きな白いおキツネ様が俺についてはるんやわ。」

このままではうまい事、意思疎通が出来んから、お前の親父さんはすぐに気が付いて、いま御本殿に来ていただくための準備をしている」

「親父が変な力が有るのは薄々知ってたんやけど、龍生は同類やっただんか。そんでおキツネ様は、お前の隣にいはるのか。僕にはなんも特に見えんのやけど」

「ただただ、無言で脇にいてはるだけなんやけど、なにぶんデカイし、気にするな言う方が無理。ただ夢の中では不思議なことに言葉が響いてきて、神社と寺がバラバラなのは好かん。何とか一つにな

らんか、と言つてきたんやわ」

そうこうする内に芳樹は神職らしく身なりを整え、龍生と弘樹を本殿に呼んだ。

朗々と祝詞をあげる姿は、さすがに決まっている。さつきまでの英国風紳士とはずいぶん違うムードだ。

心願を以て空界蓮来高空の玉野狐の神鏡位を改め神寶を以て七曜九星二十八宿當目星有る程の星私を親しむ家を守護し年月日時災ひ無く夜の守日の守大い成る哉賢成る哉稻荷秘文謹み白す

祝詞の言葉からすると大きな白いキツネは稻荷大神であると、オツチヤンは判断したようだ。

バチン！

大きな音がして、白い大キツネが神棚の中の鏡に入ったように見えた。

「（もともと隣の寺とこの社は一体であるべきもの。別れているのは不都合じゃ）」

「（ですが神の姿を感じ取れぬものたちに、どのように納得させれば宜しいでしょうか）」

確かに、正直な話をしても頭がおかしいと思われるのがオチだ。

「（お前の小倅と、寺の小娘を娶わせよ）」

「（人の世のならいでは、まだ嫁を娶ることはかないません）」

「（厄介じゃのう。そこな異界の龍の生まれ変わりに仲立ちをさせて、寺の小娘と住職をここによべ）」

「（今すぐですか？）」

龍生は異界の龍の生まれ変わりと言われて、妙に自分でも納得した。

「（難しいか？ ならば、我が今夜住職と小娘の夢枕に立とう。早くせぬと異界の龍、お前も困るのだぞ）」

「（俺がですか？）」

「（お前の穢れは完全に清めぬと、想いはとげられぬ）」

「（龍生は異界の龍だったのですか？）」

弘樹は気が付くとこの奇妙な会話に加わっていた。

「（そうだ。小倅、寺と神社が一体になるとこの地にあまたのよきことが有ろう。同時に異界の龍の前世での心願を果たす助けにもなる。よいか、みな心をあわせ、みっしょんを果たせ）」

バチン！

心霊現象のラップ音と言うには、余りに大きな音が響いたと思ったら、稲荷大神らしき存在の気配は完全に消えていた。

「（なんや、僕も変な力が目覚めたみたいやな）」

弘樹は戸惑いながらもテレパシーを使っている。

「（それにしても、ミッションですか。風変わりですね）」

「（毎日御奉仕する私がスパイ小説が大好きだから、その影響を受けられたんだろう。多分、ミッションと言っ言葉がぴったりだ、とおキツネ様は感じられたのだろう）」

「（あのおキツネ様はお稲荷様ですか？お稲荷様と呼ぶべきですか？）」

龍生はその点を芳樹に確認したかった。

「（私はそう考えるが、それでも神様のお名前を直接お呼びするのは、憚っているのだ）」

なるほど、尊い存在の名を軽々しく呼ばないというのは、日本古

来の習わしだ。

「いきなり大変な事になった。ミッション・インポッシブルです！
なんて言っても聞き入れられそうに無い」

芳樹は苦笑したが、その点に関しては龍生も弘樹も同じ感想だった。

みつしょん、かもしれない・2

「（美穂の婿は弘樹に確定らしいで。オツチャンに向かっておキツ本様がお前の小倅と、寺の小娘を娶わせよ、と言わはったからなあ）」

「（そんなあ。めっちゃめっちゃわ）」

「（美穂は僕と結婚するの、イヤなん？）」

「（私ら中学生やで、そんな藪から棒に神様に言われても、途方に暮れるわ）」

「（美穂、とりあえず、イヤなんか、そうでもないんかだけ弘樹にはっきり言うてやれ）」

「（龍生君、私の気持ち、知ってるやる？ いけずやな）」

「（俺の気持ちは、杏一筋。誰がなんと言つても変わらんで）」

杏は、あっけに取られていた。

実は古墳だと言う中学の裏庭の丸い小山の前で、龍生と美穂と弘樹が難しい顔をして顔を見合わせたり、時折視線を外したりしてじつと黙り込んでいるのだ。無言なのに、何らかの暗黙の了解と云うか、そうした雰囲気がある。無言なのに意思の疎通が出来ている？ あれは、一体何なのだろう？

「なに、あれ、何や深刻な、重苦しい感じで……傍によう行かんわ」
バチン！

驚く程大きな音が響いたと思つたら、目の前に巨大な白いキツネが居てじつと自分を見下ろしている。六畳間がこのキツネ一匹で埋

まりそんなサイズだ。

「に、にゃン 先生！」

「それはお前の好きな漫画のキャラクターだろう」

「ゆ、友人帳に出て来るような方なのかな」と思ったんですけど、
何でここに？」

杏は、妖怪たちと友達付き合いしている男子高校生が主人公の、
その少女マンガのファンだ。そこに出て来る主人公と行動を共にす
る『先生』と呼ばれる妖怪の姿と大きさが、このキツネと感じが似
ている。

「我は一応『神』とされている。異界の神の眷属、お前こそ、ここ
で中学生をやっているのはなぜだ？」

「何です？ イカイノカミノケンゾクって」

「お前、自分が何者が覚えておらぬのか？ ほう、面白い。龍の心
願と分かちがたく結びついておるのか。異界の神は面白い事を考え
るものだな」

真っ白いふさふさの尻尾をゆっくり揺り動かしているのは、どう
やら機嫌の良い証拠らしい。

「お前、あの三人とは気心が知れた仲のようだ。杏よ、学校が終わ
ったらあれらと共に我が下に来い」

バチン！

ふたたび大きな音がして、杏は思わずしりもちをついた。

「おい、杏、大丈夫か！」

「ああ、龍生……」

気がつくと、杏は龍生に抱きかかえられていた。

「お前、素であるデカイおキツネ様と会話できるんか？」

「あ、あの、龍生も見たの？ あのデッカイ白狐さん」

あの大きな白狐が龍生の夢に現れた事、弘樹の父親と弘樹の三人で聞いた「お告げ」の内容、そして今朝美穂と、美穂の祖父の夢に出てきた事、などを龍生はかいつまんで話してくれた。

「へえ、なに、あの裏山の前で三人はテレパシー使っていたって事？」

「そうや」

「ほんでもって、神様の都合的には美穂ちゃんと弘樹君に結婚してもらわなくては困るん？」

「寺と神社を一体化したいらしい」

「そんなん、横暴やわ」

「でもオツチャンは、やる気満々みたいや。何より弘樹は美穂が好きなんやし、おキツネ様も横暴で言うてるのと違う気がする」

もふもふのおキツネ様に召集をかけられた杏、龍生、弘樹、美穂の四人は弘樹の父親である芳樹の帰りを、本殿の縁側に腰掛けて待っていた。四人の視線の先には、上空にふわふわ浮かんでいるおキツネ様の姿が有る。

「弘樹も美穂も見えるんやな、おキツネ様」

「龍生君は弘樹君より先に見えたんやね」

「それはそうなんやが、俺はおっちゃんの祝詞がないと、うまい事意思疎通ができません。それやのに杏は最初からおキツネ様と普通に会話してた」

「でも、あんたら三人みたいなテレパシーは使えんのよ、私は」

つい先ほど、杏はおキツネ様と龍生たち三人の前で会話していた。三人には杏の「ええ、いやそうでしょうか?」「はい」などという受け答えの声だけが聞こえて、おキツネ様の言葉はまったく感じ取れないようだった。

「弘樹君のお父さんが戻って来はったら、みんなにお話があるんやて」

おキツネ様の言葉を受けて、こうして四人そろって待つ間、左から順に弘樹・美穂・杏・龍生という具合に座っていて、弘樹と美穂は会話は交わさないがびったり寄り添っている。気のせいかな美穂の顔が赤らんでいるように見える。

「ねえ、ねえ、弘樹君と二人でテレパシーでなんか話してる?」

そう杏が聞いても、美穂は肯定も否定もしない。龍生は「知らん」と言うのみだ。微妙に自分だけが除け者になったような、ちよつと不愉快な気分になってきた。

「杏、お前だけが素でおキツネ様といきなり話ができる。これは一体何を意味するんかな?」

「なんか知らんけど、私はイカイノカミノケンゾクって言うものらしいわ」

「イカイって、異なる世界、異界だろ? たぶん」

「ああ、そうなん。じゃあ、カミは神様? それでええかな? ケンゾクって何?」

「神の眷属、眷属という言葉は、身内とか一族っていう意味もあるけど、子分とか家来という意味もある」

「ふーん、神様の身内なら偉そうやけど、子分ならつまらんわあ」

「そうか？ 俺は異界の龍の生まれ変わりなんやて」

「なあ、じゃあ、ひよっとして龍生と杏はおんなじ異世界から生まれ変わってきたんか？」

弘樹の指摘は鋭い、と杏は感じた。

「ああ、それ、そうなんやろうな……あのな……」

龍生も弘樹の言葉に思うところがあつたのだろう。つい先日、京子ばあちゃん魂の持ち主とその旦那だと言つ二人連れがいきなり屋上に現れた時の話を、かいつまんで弘樹と美穂にした。無論キスに関しては話をしなかったが……

「異界の龍の前世の心願ってなんやろうな……よほどの事のようにやけど」

龍生は空に浮かんでいるおキツネ様を見つめてつぶやいた。

「シンガンって何？」

杏はこの所、自分のボキヤブラリーが相当に貧困だと意識させられている。特に古めかしい言葉には弱い。

「心からの願い、強い願いやな」

弘樹も龍生も当たり前のように理解できるようだ。もうちよっと勉強しないと「アホ」と思われそうだ。

杏は問題の本筋と関係の無いそんな事が、気になってならなかった。

みつしよん、かもしれない・3

「おう、みんなお揃いで、おキツネ様の御用で来てくれたんか？」
芳樹が声をかけると四人の中学一年生は一斉に立ち上がった、息子の弘樹以外の三人は会釈した。先ほどまでうるさいほど帰宅を促していたおキツネ様の「声」と言うか「念」と言うかテレパシーと言うか、は、ぴったりと止んだ。早く身支度をして祝詞を上げると言う事らしい。

「（今日は我のための祝詞の後に、龍のための祝詞をあげよ）」
「（龍神様の為の祝詞で宜しいのですか？ 異界の龍の為の言葉では無いように思いますが）」
「（気の在り様、力の形が殆ど同じじゃ。日の本に降臨する全ての龍にとつて心地良い言葉であれば構わぬ）」

芳樹は念入りに身を清め清浄な装束をまとい、命じられたように稲荷への祝詞の次に龍のための祝詞を上げた。

高天原に坐し坐して天と地に御働きを現し給う龍王は 大宇宙根元の御祖の御使いにして一切を産み一切を育て 萬物を御支配あらせ給う王神なれば 一二三四五六七八九十の十種の御寶を己がすがたと変じ給いて 自在自由に天界地界人界を治め給う ……

「恐み恐み白す」

祝詞を上げ終わった途端に真後ろの空気が揺らめき、いきなり人らしき気配が濃くなった。中学生四人は板の間に正座しているはずだ。芳樹は恐る恐る後ろを顧みた。何と、すぐそこに人間が二人出

現していた。

手に履物を持った金髪碧眼の美丈夫と、杏に瓜二つの美少女は戸惑い顔で突っ立っていた。が、すぐに気を取り直したようで、芳樹に会釈するところ切り出した。

「どうも、初めまして。異世界の龍の器をやっております。マークと言います」

どう見てもヨーロッパ系の顔に完璧な日本語と言う取り合わせは、有り得ない訳ではないが印象的だ。

「妻のフェリシアです。私も龍の器です。あちらに履物を置いて参りますね」

二人は当然のような顔をして中学生達の脇を通り、皆が置いている隣に履物を並べた。

「その、お二人は異世界の龍の『器』でいらつしやるようですが、龍を宿しておられるのですか？ 龍神を称える祝詞にあわせてここにおいでになったと言う事は」

「二人で東京に居たのですが、何かに呼ばれたような気がしてここに参りました。我々の世界の龍は、金銀で一对でして、金のほうが私、銀のほうがフェリシアの内側に宿ると申しますか、依り代とすると言いますか、そうした状態なのです。金銀の龍は条件を満たした人間に寄生しないと生き延びれないそうです」

「東京から、ここまで？ 瞬間的に移動ですか？」

「ええ。まあ、そうした力が我々には有ります。今本拠地として暮らしている世界と地球の間も、瞬時に行き来できます」

「その特殊な能力は、生まれついているものですか？」

「夫婦で行き来できるようになったのは、つい最近の事です」

それにしてもフェリシアと言う少女は杏にそっくりだが、瞳が赤く、黒い髪にところどころ銀色が混じった不思議な色合いの髪をし

ている。眼と髪の色が、この少女が通常の地球の人類ではない事を示している。

「不思議ですなあ」

芳樹は二人の少女が背格好も顔立ちもなぜこれ程似ているのか、疑問に思った。

「話せば長いことになりますが、ここに居る人皆さんに御承知おき頂いた方が、どうも宜しいようですね」

マークの説明はにわかには信じがたく、理解しがたかった。まず驚いたのが杏の祖母である伊丹京子の魂が死の直後異世界に呼ばれ、異界の『女神の申し子』である少女の中に宿り、女神の力を増幅し、地球人としての魂から新たに純粹な『女神の申し子』によりふさわしい魂を練成して分割し、一旦は伊丹杏として転生を果たしたと言う事だ。

「普通に地球人の魂が異世界に転生した僕のような形ではなく、新たな魂を作り上げて本来の魂と分割した、などと言うのは、あの世界でも京子さんだけでしょ」

相当に変則的な転生パターンで、芳樹も四人の中学生も驚いた。特に杏は自分がそのような存在であった事に、驚いたが、先日の屋上での遭遇の後であったから、意外なほど平静に話を聞いた。

「ですが、錬成度の高い強い魂が我々の今居る世界の龍の器には必要なのです。一方で地球の中でも日本は平和な国ですから、生まれたての魂を持った赤ん坊でも安全に庇護されて育つ事ができます。伊丹家の人々は善良ですし、幼い魂に良い影響を及ぼし育つと判断しました。そこで、僕が生まれたての赤子に宿る京子さんの魂を地

球に迎えに行き、これまた京子さんと縁の深い幼い魂と入れ替えたのです。異世界に生じた『女神の申し子』の娘の肉体に嘗ての伊丹京子であった記憶を保つ魂を宿すのがこのフェリシアです。そして杏ちゃんは、伊丹京子の孫娘として地球上に生じた肉体に『女神の申し子の娘』の魂を宿しているのです」

「以上で、ご質問は？」とマークが言ったので、杏は手を上げて質問した。この子には自分の問題でもあるのだ。

「女神の申し子、って女の人が居るんですか？」

「そう。居ます。大人になっていますが、杏ちゃんやフェリシアと顔が良く似ていて、黒い眼・黒い髪です。黒は僕らの今いる世界では女神を象徴する特別な色で、黒眼黒髪の間は彼女以外いません」

「その人は、言わば私のもう一人のお母さんですよ。なんていう名前ですか？」

「杏ちゃんの魂とフェリシアの肉体を生み出した人だから、杏ちゃんにとってもお母さんと言えるのかな。彼女の名前はロザリアと言います」

ロザリアは、異世界に龍が飛来する以前から存在する女神の力を受け継ぐ『女神の申し子』なので、普通の人間には無い様々な特殊技能が有るらしい。

「お前らが神の如き気配を漂わせているのは、色々込み入った事情が有るのだな。お前らのおかげで、我もこうして共に語り合えるようになったぞ」

おキツネさまは気がつく、神棚の上に居た。大きさも小型犬程度で少女が抱きしめても具合がよさそうな大きさになっている。

「（それにしても異界の龍どもが一体全体、何の探し物なのかな？
我はそれを聞かせてもらいたいものだ）」

杏は、ぎよつとした表情に変化した。芳樹の見たところ、今のお
キツネ様の大きさの変化よりテレパシーを受け止めて驚いたのでは
なかるうか？と思われた。

「（杏ちゃんもテレパシーと言うか、この話し方できるようになっ
たんかいな）」

「（どうやら、できます）」

小さくなったおキツネ様は、尻尾をゆらゆらさせている。恐ろしく
機嫌が良いのだと芳樹は感じた。

みつしょん、かもしれない・4

「さて、皆の果たすべきみつしょんじゃが、我が力を全き形でこの地にもたらすためには、神社と寺が切り離されているのは不都合じゃ。我が全き姿は寺にある三面六臂さんめんろくつひの辰狐王しんこおそのままのじゃが、そのためには『日の宝珠』『月の宝珠』『摩尼宝珠』の三つが必要じゃ。他でもない。皆に願うのは三つの宝珠を取り戻す事じゃ。それがかなえば、寺と神社の有様も良き方向に向かおう」

小さくなつたおキツネ様は尻尾をゆらゆらさせながら、皆にこう述べた。

「一体それらはどの様な宝珠ですか？」
皆を代表する形で芳樹が尋ねる。

「日の力を宿し金色の光を放つのが『日の宝珠』、月の力を宿し銀色の光を放つのが『月の宝珠』、福德の気を湛え大願成就の力を秘めるのが『摩尼宝珠』じゃ。人の目には時にキツネの姿に見える事も龍の姿に見える事も有るといふぞ」

「では、宝珠がキツネや龍の姿に見える事が珍しくないのですな？」

「そうじゃ。じゃがいかなる姿でも三つの宝珠は金・銀・金剛石に似た色を示すはずじゃ」

「金剛石とは、我々が普段ダイヤモンドと呼ぶ宝石でしょうが、色が無い澄んだものから、色々な色味を帯びたものもあります。どの様な色でしょうか？」

「そうじゃなあ。色らしき色は無い。ただ光り、きらめくだけじゃ」

「おお、そうじゃ、こうすればよいのじゃな」とおキツネ様は巨大

な玉のようなものを本殿の部屋の中空に打ち上げ、そこに金色、銀色、無色透明のまぶしく光る宝珠、次に金色・銀色・無色で光る三匹の狐、さらに同様の色目の三匹の龍の姿を映しだし、全員に見せた。

「これでわかってくれたかの？」

「姿かたちはわかりましたが、何か手がかりは御座いませんか？」

「お前が大学とやりに預けてしまった文書と、寺の辰狐王しんこおうを祭った堂のあたりかの？ 我も手詰まりなのじゃ。じゃからこうして力添えを願っている。では、皆の者頼むぞ」

おキツネ様は言いたい事だけ言うと、例によってバチン！と大きな音を立てて、消えてしまった。

「芳樹さん、その古文書を閲覧させて貰わねばならないですね」

金髪碧眼男は芳樹が名乗りもせぬ内から名前を呼んだ。

「ああ、失礼。人間の意識を読み取るのは、僕らの特殊能力の一つでして、よほど特殊なブロックでもかけられていない限り簡単に読めてしまうのです。あと、これから美穂ちゃんのお祖父さんに全員で会いに行きましょう。あちら様もさっきのおキツネ様からの接触は有ったようですから、その三面六臂はちめんろくびの辰狐王しんこおうがお祀りしてある御堂に入れて頂けそうです」

気が付くと芳樹自身も含めて全員が、マークと名乗る男の言葉に従って、美穂の家でもある寺に向かっている。

「不思議だ。なぜ何となく皆が反対意見も述べないでマークさんについて行くのでしょうか？」

「龍は狐より格上だとされるせいかもしれませんね」

芳樹もその説は承知していた。あのおキツネ様が認めるかどうかは分からなかったが……

すると、またいきなりおキツネ様がバチン！と音をさせて姿を見せた。

「我は並みの龍よりも上の位に有る神じゃ。はよう寺におもむき、三面六臂の辰狐王を皆でよく見て来るのじゃ」
それだけ言うと、また音を立って消えた。

「ハハハ、これは驚いた。まあ僕らは龍ですら無いですけどね」
確かに芳樹も中学生四人もおキツネ様の幼稚さ加減にあきれていた。

「まあ、ともかくもその辰狐王様を見に行きましょう」
フェリシアの言葉に、皆はまた気を取り直して、寺に入った。

「お邪魔致します」
神主の装束のままの芳樹に、住職である美保の祖父・正覚しょうかくが一瞬驚いた表情を浮かべた。

「今日はこつちの方の御用でお願いに上がりました。三面六臂の辰狐王様を拝ませて下さい」

「あの、白いおキツネ様の御用ですやろ？ 辰狐王堂なら、今、掃除して風を通しましたさかいに皆さんどうぞ。おや？ こちらの方は？ 杏ちゃんのそっくりさんもいてはるし」

「このお二人さんもおキツネ様の御依頼に大いに関係の有る方たちです」

芳樹の言葉に正覚しょうかくは要領を得ない顔つきになったが、マークとフェリシアが名を告げて、正覚しょうかくに折り目正しい挨拶をすると、驚嘆していた。

「見事な日本語ですなあ。それにしても……こちらは杏ちゃんによ
う似てはる方やなあ」

眼えがホンマに赤いなんて、びっくりやわ……と言つ言葉は初対面で失礼かと思ひ、飲み込んで口にしなかつたが、正覚は驚きいぶかしく思つていた。

「色々複雑ないきさつがあるようです。美穂ちゃんから、またお聞きください」

芳樹はともかくも、目的を果たす事を促した。話好きの正覚は、横道にそれるとおしゃべりが長いのだ。

案内された辰狐王堂は、小さな方丈の建物だつた。四畳半程度しか無さそうだ。普段は忘れられた状態らしい。

「辰狐王菩薩、はあ、菩薩さんなんですか」

芳樹が問つと正覚は逆に尋ねた。

「創建当時この寺は密教系で、おたくの神社を境内に構える形だつたみたいや。それは知つてはるやろ？」

「いや、最初から禅宗やつたんかと思つてましたわ」

「おやまあ、そうかいな」

「つまりは禅宗が成立する以前の時期の創建だと言つ事ですか？」

金髪で外人面のマークからなかなか鋭い指摘を受けて、正覚はまた驚いた。

「仰るとおりですね。まだ禅宗の影も形も無い古い時期から建つてる言つ事みたいです。もっと言つなら、密教が成立する以前で、寺も無い頃から此処には何がしかの御堂が有つたようですね。ウチには古い記録は何も無いのやけど、大学の先生に教えてもらいましたんや」

「最初は何が祀られていたのでしょうか？」

マークは非常に気になるようだった。

「さあ？ 廃仏毀釈で全部の記録がおかしな事になつてもつて、手がかりなしですわ」

中学生四人もこのなじみの薄い菩薩さんを観察していた。

「中央は金色、左面は白色、右面は何色なんかなあ、剥げてる」

美穂は保存状態に眼が行った。余り良好でもないかもしれない。

おキツネ様の探し物の手がかりが朽ち果ててしまっていないか心配になって来たが、口にはしなかった。

「三面六臂って聞いたけれど、羽まで生えて、なかなかぎやかだねえ」

龍生は予想よりにぎやかなデザインに驚いていた。

「中央の金色の顔、象さんみたい」

杏のコメントは少々幼稚くさいかもしれないが、それなりにポイントはついている。

「象と言ったらガネシャ、シバ神の息子で、日本の仏教だと聖天さんかな？」

弘樹はなかなか博識なようだ。

「なぜ此処にこの像が祀られているのですか？」

マークは正覚に核心に迫る質問をした。

「代々の口伝ですけどな、何や大変な祟り神さんが出て、それが天竺あたりのおキツネ様だったらしいんですわ。それをどこからとも無く現れた名も知らぬ強い神力の神様が封じてくれた言いますねん。この像は封じられた後、改心して守り神に変じた後の、元祟り神さんらしいですわ」

「ならば、なぜ、その名無し神の方は祀らなかったのでしょうか？」

「芳樹は驚いてしまった。」

「大仰な事は自分は好かん、それに自分は元来この地に有るべき神

ではない。祟り神は尊んで祀ってやれば、やがて五穀は豊かに実り、子供らが健やかに育つようになる、そない言い置いて、この地を離れられたそうですねん」

元が祟り神と聞いて、芳樹は先ほどの幼稚な反応が似つかわしく感じた。

「なあ、元来この地に有るべきではない神さんて……どこの神さんですやる？」

「さあなあ、せやけど奇妙な話やる？ どこからおいでになって、どこに行ってしまわれたものやら」

「異世界の神……かもしれませんな」

眩くマークの顔を、芳樹と正覚ははっとして、思わず見つめるのだった。

みつしょん、かもしれない・5

「マークさん達、行っちゃったな」

女子二人をそれぞれ家まで送った後、龍生と弘樹は何となく別れがたい気分で話をしていたのだが、たまたま龍生の両親は東京で親戚の法事が有って、今夜は一人で過ごす予定なのだった。それを知った芳樹と弘樹が夕食を食べて行くように誘ってくれたのだ。

マークとフェリシアを見送ると、龍生は妙に寂しい様な気分になったのが自分でも意外だった。おキツネ様やマークの言葉からすると、自分はもともと異世界の存在であったのだが、地球に転生した、そう言う事らしい。そして杏と魂と肉体を交換した杏の祖母が、マークの妻なのだという。

「本当に瞬間的に姿が消えるんやな。驚いた」

「本殿でいきなり出てきた瞬間は見てたやろう？」

龍生は屋上での事も有ったから、余り驚かなかった。あの二人なら似つかわしい気もするのだ。

「いや、僕は見てへんかった。おキツネさんに気いとられてたんや。ふっと見たらお二人さんが靴持って立ってはったから、ぎよっとした」

確かに初めて見たら魂消るだろう。フェリシアさんは目が赤いし……と龍生は思った。

「杏はお前と美穂が何をテレパシーで話しとったんか、酷く気にしとったな」

おキツネ様を待つ間に杏が自分に向けてきた視線は、思い返すと

仲間はずれにされた子供のようで、今ごろになって気になる。弘樹と美穂のデリケートな話題に気を使って杏には思わず「知らん」と言ってしまったが、何か別の受け答えをするべきであったかかもしれない。

「杏は僕の事なんて気にしとらんやろ？ 龍生がどのぐらい自分の言う事を聞いてくれるか試したかったんと違うか？ それとも女同志の友情かいな？ それなら美穂に聞けばええこつちゃ」
「ただ単に、仲間はずれがいやだっただけの事やろつ」

自分はいつだって杏を守るつもりだし、一人ぼっちにしたりしないのだから、本筋に関係無い細かい事まで気にしてほしくない。弘樹と美穂の事は二人だけの事で、自分も杏も変に首を突っ込むべきでは無い。幼いころの虫取りや鬼ごっこみたいに四人一緒とはいかないのだ。そう言いたかったただけなのだが、言葉にすると杏が傷ついたような顔になるような気がして、言えなかった。

「それにしても、龍生は杏一筋と決めたら揺るがないのやな。」

「揺らいたら、色々な厄介ごとが出てくるやろつ」

「美穂はそれでも、待ったんやで、龍生を」

「それを弘樹が言うのか。俺は杏一筋。美穂だけやのうて誰に聞かれても、俺の答えは一つや」

「いや、そうなんやけどな。美穂がなんやかわいそうで」

「かわいそうな美穂を慰めればええやんか」

「なんや、いけすかん言いぐさやな。龍生みたいなモテる奴が言うのと、なんか腹立つ」

「そんなん、知らん。俺は昔から誰に聞かれても杏が一番だと言っているんや。キスするのも杏だけや」

龍生が当然のように言い放った言葉に、弘樹はショックを受けた

ようだった。

「キス、したんかいな」

「そうや、生後六か月以来、杏一筋なんやから、キスぐらい当たり前や」

「それ以上は？」

「俺としては婚約のキスのつもりと言っておいた。杏も『了承いたしました』と言った。互いのおふくろさんは仲良しで将来的に俺たちが結婚するのは大賛成なんや。せやけど、釘は刺されてる。『中学生としての節度は弁えなさいよ』とか、『皆に祝福して貰えるように、軽はずみな事はしないでね』とか、なかなか煩い」

「そうかあ……キスしたんか……美穂はどうなんやろうなあ」

弘樹は顔を赤らめ、当惑したような表情を浮かべている。

「きばりや」

「せやかて、拒否られたら、僕、立ち直れんやろうなあ」

「美穂様をお守りするナイトに徹したらええやん。その内、きつとしかるべきチャンスは来るやろう」

「そうかなあ」

「お前だけやろ、美穂を『西洋便器の蓋』って言わんの」

「おい、龍生！ お前は言うたんか」

「杏と告白しあってキスした後やったから、泣くかなと思うたけどわざわざ口に出して言った。『龍生君のいけず』て言うたな。今度からそこですかさず弘樹が慰めればええやん。俺は悪役に徹するさかい」

龍生の目を見て、弘樹はその意図を理解したものの、美穂が泣いたと聞くとやはり可愛そうでたまらないのだろう。さりとして、龍生の心遣いを有り難いと思わないわけでもないように……気持ちは揺

れているようだ。

「あのマークさん夫婦な、俺と杏が屋上でファーストキスを交わした直後に出現したんやで。しかも『龍生君と杏ちゃん、ファーストキス、おめでとう！』とまで言われて焦った。それやのにあの二人、これ見よがしにエロい腰つきで体を密着させてチュッチュチュッチュキスしまくって、鬱陶しかった」

「そんなバカツプルには見えんかったけどなあ」

「確かに今日はえらく折り目正しかったな。あのマークさんは色々裏表が有りそうで、油断がならん」

「でも、僕思ってたんやけど、マークさんとお前の顔、似てるで。どっちも派手なイケメンやけど、その……髪や目の色は違つとつても、基本骨格が似てるいうか、目鼻立ちが似てるいうか、そんな感じや」

「俺、あの人の『弟にあたる人間』の魂の生まれ変わりらしいわ」

「ほお……素直に弟と言わんで、なんでそないに持って回つた言い方するのやろうな」

「マークさんの俺を見る視線に、何か微妙に刺々しい雰囲気を感じるんやわ。うんと仲が悪い弟だったとか、複雑な事情の絡んだ異母兄弟とか、そんなもん？」

「なるほどな。それなら有り得るような気がする。きっとその複雑な事情と『異界の龍の前世での心願』とか言うもんが関わるんかな」
「俺も無茶無茶気になつてる。どうも俺自身の事らしいし。『異界の龍の前世での心願』……おキツネ様は教えてくれるやるか？ ちよつと大人げない神様みたいやけど」

「そつやなあ……」

二人はしばらく無言で、畳に寝転んでいた。すると、弘樹の母が夕食が出来たと知らせて来たので、二人は返事をして部屋を出た。

みつしょん、かもしれない・6

「な、名残の八モに松茸！ いやあ、嬉しいな。弘樹の所の御飯、ほんまに素晴らしいな」

名残の牡丹八モに焼き松茸、シメジ・舞茸・三つ葉と鶏の汁物、茶碗蒸し、九条葱のぬた、万願寺とうがらしとジャコの炒め煮、生麩と里芋の炊き合わせ、日野菜ひのなの漬物と言う「いかにも関西」と言う取り合わせが龍生を喜ばせた。

一方で龍生の家の献立は大抵、白い大振りの洋皿に肉料理と野菜の添え物・サラダか野菜の和え物・味噌汁、と言う感じなのだ。好き嫌いが多くて肉好きの父親に合わせるうち、そんな形に落ち着いたらしい。そこそ味は良いのだが、風情が無いのも事実だった。

「おおきに、龍生君。何や立ち直れたわ。弘樹ときたら『何や、ハンバーグやのうて、油気の抜けたような年寄りくさい献立やな』やて。がつくり来るやろ」

ちよつとぼつちやりして、笑うとエクボのできる弘樹の母・百代は、歳の割りに可愛らしい感じの人だ。英国紳士風でちよつとお澄ましやさんな芳樹とは対照的で、庶民的な暖かい雰囲気を漂わせている。

「せやかて万願寺とうがらしとジャコの炊いたん、登場回数多すぎやわ」

弘樹はいかにも食べ飽きたと言わんばかりだ。

「俺は滅茶苦茶好きやけどな。食べると何かホツとするやん」

「そつやなあ……氏子さんが色々季節の折々に持って来てくれはる

んやけど、若向きの献立にはしづらいものが多いな。さつき来たのは、子持ち鮎やし……」

「こ、子持ち鮎」

聞いただけで龍生はごくりと、喉を鳴らした。

「卵は鶏でも魚でも何でも好きやな、龍生は。魚で子持ちのものは全部好きみたいやし」

「龍生君、好きか？ 子持ち鮎。塩焼きして、これで一献飲むと格別やで。二人ともまだ中学生やさかいに、相手はしてもらわれへんけど、龍生君は将来、いけそやな。おお、そや、子持ち鮎、包んで帰りに持たせてあげて、な？」

「はい。そうします。弘樹、どうも好かんらしいのよ」

「そういえば、弘樹は洋食が好きなんやな」

「そやなあ……ハンバーグにハムにソーセージ、ローストビーフにフライドチキン、そんなあたりがええなあ。後は稲荷寿司とかカツ井なんかが好きやな」

「そんなん、ウチの母親はしょっちゅう俺に食べさすけど、弘樹のお母さんみたいに繊細な料理は出してくれた記憶が無いわ。生麩と里芋の炊き合わせなんて、ウチでは食べられへん」

「互いに無いものねだりやな。人間なんて、今有る幸せをすぐに忘れてしまう生き物やからなあ」

芳樹の言うのも、もっともなのかもしれない。

「それにしても、弘樹の好物はあのおキツネ様と似てるんとちゃうか？」

芳樹がそう思うのだから、そうなのだろう。

「へええ、おキツネ様は、そう言う肉系統がやっぱり好きなんですか」

「絶対お好きやと思うわ。普通は川の魚・海の魚・野鳥に鶏肉辺りまでしかお供えせんもんや。諏訪神社の鹿や、鹿島神社の猪なんか

例外的なもの以外、原則的に四足はあかん、特に家畜の肉はダメみたいに言うのやけど、トンカツをお供えしたら、えらく気に入って頂いたみたいやった。ハム・ソーセージ・ハンバーグも絶対お好きやな」

「それで、僕はそのお下がりが頂けると嬉しい」

「お下がりを人間がいただける訳ですから、神様は何を召し上がったんでしょう？」

「ほんまやなあ。僕も実は子供の頃から不思議に思ってたんねんけど、人の思いや食べ物の気配や佇まいかなあ。人が丁寧に美味しくしようと出来上がった物、真心がこもった物なら、なんでも喜んで頂けてるような気がするときも有るねん」

ふつと芳樹は考え込むような表情になった。

「どないした？」

龍生も気にはなつたが、息子である弘樹も妙に感じたようだ。

「いやな、肉の類を供えたときの何か獣くさい雰囲気と……もっと澄み切った、清らかな、そうやなあ、霊格が高いと言っんか、そんな時の雰囲気と……あれはおいになつていてる神様が違っのかもしれんなあ……建前上はおんなじ神様言う事になつてんのやけどな」

「ひよつとして、美穂の祖父さんの言うてはつた……」

弘樹は父親のそうした神霊的な事柄に対する感性を信頼しているだけに、大いに気になったのだから。

「マークさんが言っていた異世界の神でしょうか？」

龍生は緊張すると発音も言葉もすっかり関東風に切り替わる。これは関東生まれの母親の影響らしい。

「なんやの？ 異世界の神様で」

百代も夫や息子と友人が一同に表情を変えたので、何事なのかと不審に思ったらしい。

「あのな、今日なあ……」

芳樹は百代に今日の顛末を語りながら、情報を整理しているようだった。

「ふえええ、杏ちゃんのお祖母ちゃんですか。異世界？ それ、伊丹さんの奥さんにお会いした時、触れんほうがええですよ。信じてもらえそうも無いし……」

「そうやなあ。杏ちゃんが、家族の人に話すまで、だまつとき」

百代は奇妙奇天烈な話に、頭が上手くついて行かないといった感じだった。

「龍生君もその世界の人の生まれ変わりなん？」

「そうらしいわ。マークさんは金髪で緑の眼やったけど、顔のつくりは龍生とよう、似てんねん」

芳樹は眉間に少ししわを寄せて、自分の考えを纏め上げつつ有る様で、こんな風に呟く。

「まあ、それはそれとしてやな……神格の高い神様が御自分で名無しの権兵衛で構わん、代わりに崇り神を祀って鎮めよと仰ったのが真実として……マークさんの言わはったように、異世界の神様の可能性は高いんかもなあ」

弘樹も額にしわを少し寄せ、険しい表情で考え込んでいたが、ポツリとこう言った。

「マークさん達、何のために地球にワープして来はったんやろ？」

龍生は何か、その辺の事情は聞いているか？」

「何や杏と僕が将来、仲のええ夫婦にならんと、何かあちらの世界にとつて不都合が有るらしい。様子見と言つか、監視かな。後は、何か僕らに手伝わせようとしてたみたいや」

「ふうん、今日はそんな話出んかったな。何でやる」
芳樹は弘樹と龍生のやり取りから、新しく疑問が湧いたらしい。

「何ぞ身内の恥とか、大っぴらにしたくないとか……かもしれませ
ん。あのマークさん、結構裏表の有る性格みたいですし……皆さん
といてる時と、俺と杏だけの時と態度が違いすぎますもん」

「そうかいな。せやけど賢そうな人やな。日本の歴史にも詳しいよ
うやったし」

「賢い事は賢いでしょうけど、何と云うか狡賢い、そんな気がしま
す」

龍生はどうもマークをそんな風に感じてしまう。なぜなのか自分
でも理由ははっきりしないが。

「なあ、マークさんの目的と、おキツネ様の『みつしょん』、きつ
と関わりが有るんやろうな」

芳樹にそう言われて、龍生と弘樹は目を見合わせ合点した。

「確かに、そうかもしれませぬ。きつとそうです。そうなたら、
その三つの宝珠とやらを探さんといかんですね」

「せやけど、闇雲に探してもなあ……なあ、大学に預けた言う古文
書はどないなつてんねん？」

「弘樹も気になるか。そうやな。そこからまず固めて行くしか無い
なあ」

「美穂の祖父さんの所は、古い記録はもう無いそうですから」

やはり記録が存在しないのでは、雲をつかむようでもうにもなら
ないと龍生も感じていた。

「よし！ 近い内大学に行って、あいつの研究室の連中にも手伝わ
せたる」

芳樹はその『あいつ』なる人物の事を考え始めたようだった。

えらいじつちゃ・1

「なあ、お父ちゃん、何で私の名前は杏になったん？」

「そらまあ、その……あれやで……」

杏の父親で、京子の長男である高志はちょっと言いよんどんでいた。

「前にも言った様に、お祖母ちゃんが乗っていた飛行機の地面に激突した推定時間と日付と、杏の生まれた日付・時間がおかしなくらい、ぴつたり一致したのよ」

母親の康子は、いまだに大阪弁を話せない。

「日付が一緒なだけでも、滅多無い事やと思うんねんけど、分単位まで一緒言うのんは、ただ事では無さそうやろ？」

高志は事故の時の辛い記憶がよみがえって来たらしく、暗い表情になった。

「つまり、お父ちゃんと私は、あんたがお祖母ちゃんの生まれ変わりののかなと思っただけよ」

康子も色々昔を思い返しているようだった。

「……あのな、生まれ変わった京子ばあちゃんと私、肉体と魂を交換したって聞いたんやけど、それって……お父ちゃんもお母ちゃんもどない思う？」

「有り得るのかな、分からんわ、そんな事……って、そんな話、誰に聞いたんや！」

高志が大声を上げると、急に大きく空気が揺れた。

「そんな高志、私が言うたに決まってるやん」

うわっ！ と高志と康子は思わず声を上げた。赤い眼の杏によく似た少女がいきなり目の前に出現したからだ。

「私は異世界に生まれかわったんやわ。普通の人間と少々違う所が有ってな、今はこうやって目的地に、いきなりワープできんねん。どない？ 今のこの顔、杏ちゃんによう似てるやろ。異世界の神さんの縁続きになると、こないな顔のつくりになんねん。そう言えば高志、たまげてたなあ、自分と似ても似つかん可愛い子が生まれて」「ホンマに、ほんまにお母ちゃんの生まれ変わりなん？」
「証明しよか？ あんたが読みたがっていた伊丹京子の遺品の鍵つきの日記、持っといで」

高志は仏壇の引き出しから問題の日記を持って来て、恐る恐る謎の少女に差し出した。日記の鍵はダイヤル式なのだ。鍵を壊して読もうかどうか幾度も高志は悩んだが、どうも気がとがめて、それも出来ないまま、月日が過ぎたのだった。

「ほら、開いたやろ。それでここに挟んであるのが、あんたに連れられて康子さんがこのウチに初めて来てくれはった時の写真、それでこっちがあんた達の結納をやった東京のホテルのパンフレット」

もう、この頃には高志も康子も、この赤い目の少女が伊丹京子の生まれ変わりであると信じ始めていた。

「あのかなあ……」

高志は言いにくそうに顔をしかめて、悲しそうに眼をしょぼつかせた。

「お父ちゃんのお墓なら、お参りしたで。肺ガンやったって？ 大変やったな。せやけど、無事にお父ちゃんも生まれ変わって、頑張っってはる。せやから、あんたたちも、もう、あんまり悲しまんどいて、な。ご両親に大切に育ててもらて悪くない境遇やと思うわ。もつとも今のあの人には前世の記憶は、一切無いのやけど」

「なあ、何でそんな事までわかるねん」

「お父ちゃんの臨終の瞬間、夢で見たんよ。それで息を引き取る最後の瞬間に『きょうこ、きばりや』って言うてくれはったのも見たわ」

その言葉を聴いて、もう、完全にこの少女が伊丹京子の生まれ変わりだと高志は確信した。

「なんで、介護した子供たちやのうて、亡くなったお母ちゃんの心配してはったんやろ？」

「実際、異世界で色々難儀な仕事をやってたさかい、その気配を感じ取ってエールを送ってくれはったんや。そんでもって、その夢は私だけやのうて、今の夫も一緒に感じ取ったんやで」

「今の夫って、お母ちゃん、再婚したんか？」

「あちらの世界では初婚になる。今の夫はあの世界の皇帝なんや」

「コウテイって、皇帝陛下？」

「そう。せやから私は今はあつちの世界で皇后陛下やってんねん」

「へええ……なんや、頭がついてゆかれへん」

高志は頭を抱え込んでしまった。

「あの、お母さん、杏がさっき言っていた事ですけれど、魂と肉体の交換って、何ですか？」

「康子さんが生んだ娘は、今の杏ちゃんの肉体に今の私の魂が入って生まれ変わった状態だったんです。でも、ある日を境に突然、

母親であるあなたに対しての反応の仕方が変化したんじゃない？」

相手が大阪弁ではないと、途端に標準語モードになるのが生前の伊丹京子と同じかもしれないと、高志は少女の話しぶりを聞きながら感じていた。

「ああ、思い出しました。生後三ヶ月ちよつとして、初めてベビーカーに乗せて商店街に行った日の帰りから良く泣くようになって、夜泣きも始まって、びっくりしました」

「あの日、商店街にまで今の夫が異世界の神様を引き連れて、私の魂を迎えに来ました。代わりに異世界の神様の眷属に当たる家の女の子の魂を、今までの肉体に納めたわけです。この異世界の魂も伊丹京子にとってやはり孫のような存在なんですけどね。色々独自ルールがあつて、わかってもらいにくいでしょうから、またおいおい御説明します」

康子は長い間の謎が解けて、スッキリしたらしい。すると、それまで黙っていた杏が恐る恐る質問した。

「あのう……あなたをどう呼んだらええんです？ お祖母ちゃんつて言うのも奇妙やし」

「フェリシアと言う今の名前で呼んでもらうのが、やっぱり一番しっくり来るかな」

「フェリシアさんは、この前、中学の屋上で旦那さんと一緒に現れたとき、私と龍生がラブラブじゃないと、使命と言うかお仕事というか、色々支障が有るって、言うたでしょう？」

「言ったなあ」

「それって、どないな意味？」

「言った通りの意味。二人の転生は、あちらの世界にとってはとて

も重要な事なんやと言ふ事だけは、承知しておいて欲しい。後は…
…まだ、あんたら中学生やし、気が早い話をするわけにもいかんわ」
「杏が龍生君と結婚するのは、もう決まりなんですね？」

康子の問いにフェリシアは頷いた。

「前世からの因縁と言つか、強い願いと言つか、色々複雑ないきさつがあつて、是非そうなつて欲しいとは思ふんです。でも、基本的に今は、康子さんと龍生君のお母さんの申し合わせ通り、中学生らしい節度有るお付き合ひを続けて欲しいものですね」

「なあ、宮さんの所もウチも一人っ子同士やで、苗字や墓やこの家の事はどうしたらええんや？」

「苗字や墓は他の孫がついででもええやん。次男やけど広志の所は男の子ばかり三人もいてるやろ。この家は希望を言つたら……杏ちゃんも龍生君が住んでくれると一番嬉しいな。そうすると、生まれ変わったお父ちゃんも遊びに来やすいはずやから」

「と言ふ事は、お父ちゃんの生まれ変わりの子は、ひよつとして杏や龍生君の同級生か何かかいな？」

その高志の問いに、フェリシアと名乗る母の生まれ変わりらしき少女は当惑したような表情を見せてからこんな風に答えた。

「ああ、ごめん。今のは聞かんかった事にして。今のお父ちゃんは、前世の記憶がまるで無いねん。知らん方がうまく行く事も色々有るよつて。その内月日がたてば自然とわかる事やから、まだ、そつとしておいて欲しい」

「あかん、そろそろ失礼するわ」と言い置いて、またいきなり少女が消えてしまった後には、先ほど鍵の開いたばかりの伊丹京子の日記帳が残されていた。

えらいじつちゃ・2

「やっぱり、夢ではないわな……日記帳はこうしてここに有るし……」

高志は先ほどまでここに居た少女が、真実母親の生まれ変わりなのだろうと思いつつも、余りに突拍子も無い『事件』をどう受け止めるべきか、悩んでいたようだ。先ほどから鍵の開いた母親の遺品の日記帳をパラパラ捲ったり、頭を抱えて唸ったりしている。

康子は食べ終わった昼食の後片づけをしながら、ちょっと見た目には平静に見えるが、水道の水を出したまま手が止まっていたりする。

「お母ちゃん、お母ちゃん？ 水出っ放し」

杏が声をかけるまで、ぼんやりしていたのだ。杏の見る所、フェリシアのいきなりの出現がよほどショックであったらしい。

それでも康子はどうにかこうにか食器を片づけ、買い物に出かけるようだ。

「夕飯のお買い物に行ってくるわ」

「なんかお母ちゃん様子が変だから、私も一緒に行くわ」

高志は一人で祖母の残した日記帳をゆっくり読みたいのでは無いか？ 杏はそんな気もしたのだ。

母娘で休日に商店街に出かけるのも久しぶりだ。幼いころの様に道すがら話をした。

「私、今、変かなあ」

「変。フェリシアさんが出てきたのが、そんなにショックやった？
私は三度目やから慣れたけどな」

「さつき中学の屋上でって言うていたけれど、他にはどこで？」
「お神社の田辺君のお父さんや、お寺の浜田さんのお祖父さんと一緒に会った。その前に大きなおキツネ様に会ったんだけどね。そのおキツネ様が三つの宝珠、ってものを探していて、そのお手伝いのためにフェリシアさんと旦那さんのマークさんがお神社に呼ばれたみたいだった」

杏はおキツネ様の様子を詳しく説明すると、康子は「なんだか大変ねえ」とため息をついた。

「お母ちゃん、今日は『何、意味不明な事言っているの』って言わんねえ」

「あれだけ奇妙な体験をすれば、そんな狐もいるのかなって結構すんなり話を聞けたわ」

杏はこれまで色々と奇妙なものを見てきた。靈魂とか妖怪とかの類では無いかと思うのだが、康子は「そんな非科学的な話、信じられないわ」などと言って取り合ってくれなかったのだ。田辺弘樹の父親である神主の芳樹や、浜田美穂の祖父で住職である正覚は、そうしたものに対する感覚が普通の人より鋭いようで、杏の話も笑わないで真面目に聞いてくれたし、同じ幽霊や妖怪を見て浄化したり調伏したりと言う事もあったのだった。

「じゃあ、田辺さんや浜田さんのおうちの方は、あのフェリシアさんの事を承知してるのね？」

「うん。弘樹君のお父さんと美穂ちゃんのお祖父さんは、今の旦那さんのマークさんとも話をしたわ。その時は自分が皇帝やなんて話にしてへんかった。『異世界の龍の器をやっております。マークと

言います』言うのんが自己紹介やった」

「何なのかしら？ 龍の器って」

「私もようわからんけど、異世界に金銀一对の龍がいて、金色の龍がマークさんに、銀色の龍がフェリシアさんに宿っているというか寄生しているというか、そんな状態らしい。田辺君のお父さんが一番色々詳しく分かってはるみたいやった」

「宮さんのおうちの方は、どうなのかなあ」

「龍生は全然そういう話は、家族にせんみたい。そうそう、おキツネ様が言うには龍生は異界の龍の生まれ変わりだって。マークさんが龍生も異世界の関係者だって言ってた」

「ねえ、宮さんの奥さんの前では龍生なんて呼び捨てはやめてよ」

「小さい頃からそうやったやん」

「それでも、中学生になったのだから礼儀というか節度というか、わかまえないといけないわ……それにしても、龍生君て、龍の生まれ変わりなのか。へええ、なるほどね」

「なんか、心当たりが有るん？」

「宮さんがね、龍生君を産む前に、幾度も銀色で目が赤い龍の姿を夢に見たらしいわ。だから名前に龍の字をつけたらしいの。龍神様のご加護でも受けている子供なのかなと思っただんですって」

たどり着いた日曜午後の商店街は、ずいぶん混雑していた。幾つかの地方の都市にも住んだ経験があるが、人出の多さはやはり段違いだ。賑わう商店街はやはり、大阪に戻って来たのだという感慨を深くする。

「あ、あそこの美味しいたこ焼き屋さん、相変わらず大繁盛やね」

「やっぱりたこ焼は大阪よね。買い物に帰りに買って帰ろうか」

「あゝ、私、あっちの豚まんとか、みたらし団子も食べたい」

「じゃあ、ちよつとづつ、全部買おう」

「お母ちゃん、太っ腹」

「ふふふ、全部お安いわよ」

それでも、やはり母親はいつもより気前が良いと感じる。

「さあ、これから始まるタイムサービス、頑張ろう」

「おう！」

母娘がスーパーのカートを取ろうとしたその時に、後ろから声がかかった。宮龍生の母・真知子だ。康子同様、真知子も関東の出身である。

「今、これからお宅に行こうかと思ってたの。チョットお話が有って。あそこのケーキ屋さん、新作が出たって……お話がてらお茶しない？ それともお急ぎ？」

「夕飯に間に合えば、それで構わないわ。新作って、どんなの？ あそこ地味な店構えだけど、なんでも美味しいわよね」

「私はロールケーキの新作が、すっごく気になるの……って、杏ちゃんも一緒に良いかしら？ その、龍生の前世って言うのに関係ある話で、杏ちゃんも大いに関係してるそうなんで」

「ああ、今、ちょうどその話をしていたのよ」

母娘は宮真知子の後について、ケーキ屋に入った。

他の地方ではこんな古めかしい商店街の一角に、マスコミでも話題の美味しいケーキ屋が有るのは珍しいのではないだろうか。食べ物に厳しい大阪だからこそ、味一筋で競争に打ち勝ってきたこう言う店も有るのだろう。

「二階に行きましょう。その方が落ち着いて話せそうだわ」

新しく二階を改装して設けられたと言う喫茶コーナーは、なかなか

か洒落た雰囲気、掃除も行き届き気持が良い。

「宮さんのお宅に、誰か来はりました？」

「龍生の前世の兄にあたる人、というマークさんて人が来たの」

「ウチの方には杏とよく似た顔のフェリシアって人が来たわ」

「その人、杏ちゃんのお祖母ちゃん生まれ変わりなの？ マークさんがそう言ったけれど」

「主人はショック受けていたのよねえ。一番お母さん子だったから杏そっくりの女の子がいきなり出現して、生まれ変わりだなんて言われて、まだ正直頭が混乱してるみたい」

康子の言うように、父・高志のショックが一番大きかったのは確かだと杏も思った。

「うちの方は、たまたま高校時代の同窓会に出ていて主人は留守だったんだけど、龍生とお昼を食べ終わった直後に、いきなり部屋にマークって人が現れて、びっくりした。龍生が全然驚かないのも、なんだか私はショックだわ。それでね、龍生とマークさんの二人でどこかに出かけちゃったのよ」

「ねえ、おキツネ様からの頼まれごとって、なあに？ 杏ちゃんは知ってるって聞いたわ」そう言う真知子は、どうやら新作ケーキの味を楽しむどころではない、落ち着かない気分であるようだ。

「ここが奇妙な波動を感じる場所なんだが……」

マークは教育委員会が建てた「立ち入り禁止」の札の前に、難しい顔をして立っていた。この中学の裏庭は桜丸山古墳という名の、れっきとした古墳時代の円墳らしい。

「俺、以前ここで奇妙な声を聞いたことを思い出しましたよ」

「どんな声だった？」

「どこか知っている声のような気がする、たぶん男の声だな。呼び止められたんですよ。『待て』と。俺が足を止めると『まだ機が熟しておらぬな、行くが良い』と言われました」

「いつの話だ？」

「小学五年生になる直前の春休みだから、二年前ですかね。俺はまだ千葉に住んでました。親父が本社に用事があるのに、俺と母親もついて行って懐かしい社宅のみんなと会ってから、中学生の兄ちゃん姉ちゃん連中について、ここで咲き始めた桜の木の下に立って話し込んでいたんですが、そろそろ新幹線の時間も迫ってるんで、立ち去ろうとした瞬間、腕の所を掴まれたような気がして、立ち止まりました。その瞬間、声が聞こえたんですね」

「古墳は発掘済みなのかな？」

「そこに書いてあるように府の教育委員会が発掘して、報告書も有りますよ。すぐその図書館で読めます。持ち出し禁止ですけどね、コピーぐらいできますよ」

「と言う事は、龍生君も調べてみたんだな」

「ええ。内部は鎌倉期に盗掘された可能性が高いそうで、残っているのは割れた銅鏡のかけら、さび付いた剣、朽ちた木棺、大量の朱、器台っていうんですかね埴輪の元祖みたいな、あとはかなりたく

さんの壺だか瓶だかのかけら、そして男性の腰骨、骨粉、そんなところですよ」

「腰骨は古墳の主かな？」

「被葬者であると推定されてるようですけどね、壺のかけらに紛れ込んで見つかったようです」

以前は自由に入れた頂上部は、無粋な真新しい鉄条網付きフェンスで囲まれている。

「ちょっと、中を確かめてくるよ」

マークは一瞬で、立ち入り禁止の部分に入り込んだ。

「誰か来ると厄介ですよ」

「気配が無い。大丈夫だ」

龍生の目には、マークが桜の葉がすっかり色づいた大木の下でじつと立って考え事にふけっっているだけのように見えたが、そうでもないのかもしれない。

「この近所に、もっと小さな円墳が二つあったな」

「ええ。黄金丸山、白銀丸山、です。ここから真南の方向ですね。」

江戸時代は双子山なんて呼んでいたようです」

「その隙間からで良いから、この桜の木の枝に触ってみてくれな
いか？」

「別に構いませんが、なぜまた？」

「桜は霊的な波動と馴染みやすい樹のようなんだ。この樹の力を借りて、ここに存在する残留思念というべきものを増幅させて読み取るうと思うんだが、君の波動がうまくなじみそうに思われる。君の魂の記憶の所為かもしれないな」

「魂の記憶ですか？ それは一体どんなものなんですか？」
「まあ、君の場合はそのまま前世の記憶だろうなあ」

マークは急に、塀の中から龍生に射る様な視線を向けてきた。それがこれまでののどかな話しぶりと余りにもチグハグで、なぜ自分が時折こんな風に睨みつけられなくてはならないのか、龍生はこの間から疑問だった。

「チョツとばかり胸糞悪い情景を見るかも知れないが、頼めるだろうか？」

「それって、俺の前世ってやつと関係が有るんですか？」

「僕の推測が正しければね」

マークが桜の幹に手を置き、頷いたのを合図に、龍生は塀の隙間から垂れ下がる大枝の一部を握り締めた。

「な、なんだ、これは！」

龍生は絶叫した。

「ああ、もう良いよ。御協力感謝する」

気が付くと、龍生は腰を抜かして地面にへたり込んでいた。

「なあ、マークさんは知ってるんだろう？ 今の凄まじい情景が一体何なのか」

「ああ。君の地球への生まれ変わりを計画したのは他ならぬ僕だし」「生まれ変わりを計画するって、それ……」

「霊格は高く魔力は強い特殊な魂だから、地球への転生にも自身の希望を最大限取り入れた。今、君は前世で渴望していたものを手に

入れているはずだ」

「何をそんなに欲しがっていたのかな」

「心の通い合う暖かな親子関係、良い友人関係、心から愛しく思う配偶者、だな。結婚はまだ待たねばいけないが、まあ、希望通りになるだろう」

マークはあえて一番肝心なことを伏せている。そう龍生には思われた。なぜ「生まれ変わりを計画」したのか？

「なあ、俺はマークさんの何なんです？ いや、何だったんです？

」

「生きている間は、一度の面識も無い間柄だ」

「前に言っていましたね、俺が弟のようなものって……」

「父親は廃人と成り果てた皇帝だった男で、前世の君と僕は母親が違う。どちらの母親も事情は異なるが、陰謀に巻き込まれ毒殺された」

「さっきの凄まじい情景は何だったんですか？」

「君が母と弟・妹を一度に毒殺されて失った直後、我を忘れて魔力を暴走させた時の様子だ」

「たくさんの人を殺してしまっただんですか？」

「ああ。無実の人間を多数巻き込んでな」

「これがマークさんが『生まれ変わりを計画した』理由ですか？」

「これだけじゃないけれどな、まあ、最大の理由だ。今したかったのは、君に前世の罪を知らせる事じゃない」

「じゃ、何が目的なんです？」

「あの惨劇の情景の刺激で、微弱であった波動が強まり、はつきり読み取れた。君が引き起こした事件は異世界のものだが、あの波動の持ち主が清めたのは、この地域で起きた同様の惨劇だったのだ」

「じゃあ、ここでの惨劇を引き起こした犯人は？」

「人じゃないな。恐らくは、祟り神と呼ばれるような存在だ」

そういえば美穂の祖父・正覚は何と言っていた？「大変な祟り神さん」と言っていたではないか……

「マークさんは、何が目的なんですか？」

「その祟り神を封じたと言う『名も知らぬ強い神力の神』の正体が知りたい」

「なぜですか？」

「まあ、色々あってね」

どうも自分は、この『兄』とは前世で相当ややこしい関係であつたらしい。そして、どうやら自分は大きな罪を犯した結果、地球に転生する事になったようだ。

「なあ、前世で俺はマークさんに殺されたのか？」

「いや、言っただろう、一度も生きている間、会った事が無いと。

まあ、自滅を誘うような事はしたがね」

「じゃあ、俺はその誘いに乗って自滅したのか？」

「……そうだ。まあ、君が僕の立場でもそうしただろうさ。もう過ぎたことだ、余り悪く思わんでくれ」

マークは先ほどとは打って変わって、龍生と視線を合わせるのを避けた。

「俺は……異世界も、前世も、あんたたちが現れるまで何も知らなかった。知らずに平和に楽しく暮らしていた。それなのに、あんた達がいきなりやって来て、色々引つ掻き回されている」

「すまん。だが……君ほどの霊力が有れば、多かれ少なかれ前世の記憶を蘇らせていたはずだ。僕たちの介入で、その時期が多少早まりはしたが、悪い事ばかりでも無いはずだ」

「たとえば何が良い事だっって言っんだ」

龍生は話しているうちに、無性に腹が立ってきた。

「君が杏ちゃんど、間違いなく夫婦になれるようにせいぜいサポートさせて貰っよ」

「それも、何か異世界の事情に関わるのか？」

龍生の問いに対して、マークは無言で、ゆっくりと頷いたのだっ
た。

えらいこっちゃ・3 (後書き)

季節は秋なので、矛盾する記述を改正しました

えらいじつちゃ・4

「なあ、芳樹、桜丸山古墳は色々とけつたいなんや」

「どう、何がけつたいなん？」

「あの古墳の玄室の格好が奇妙と言つか珍しいんや。日本の古墳では唯一とちがうかな？」

「それからほかに？」

「あの中から出てきた瓶や壺のかけらやけど、北は青森辺りから、南は九州南部までのものが含まれている。特に量が多いのが吉備と尾張と越のものだが……それに、あの年代の剣と、古すぎる特殊器台がちくはぐなんや。で、鏡が本物の中国製で超高級品や。鏡が副葬品に含まれない方が普通の年代に、あないに凝った細工の物が副葬されてるのもなあ……」

一般的に古墳の副葬品の鏡は日本製のものが多いそうで、中でも特に三角縁神獸鏡と言う型式のものが多いらしい。時代が下って五世紀ごろの巨大古墳の時代になると中国大陸製の画文帯神獸鏡の比率が高いという。

「この鏡は一応、双龍文鏡と言うカテゴリーで考えるんやけど……デザインがホンマに珍しい。割れたかけらから推測される模様の龍の絡み方が、ギリシヤ神話のケーリュケイオンそっくり、ケーリュケイオンやで。その時期の中国製の鏡では、まずありえんデザインやな。しかも画像分析して、偶然見つけたんやが、二匹の龍はそれぞれ金と銀で象嵌されていたようなんや。それがホンマならこれまた奇妙やでえ……」

芳樹は母校の大学で考古学の教授をやっている人物の研究室で、いろいろ話を聞いた。概ね知りたいことは知り得たような気がする。

考古学的なことはピンと来なかったが、古墳の墓室が鎌倉期に盗掘を受けるまでは、中国風のレンガで作ったなかなかしつかりした物であった事。日本の古墳と言うより、小アジアから中央アジア方面の墓を連想させる構造であったらしい事、被葬者は副葬品のおかげから察するに九州から東北までの広い地域と何がしかの重要な結びつきを持っている特殊な位置にいた人物であったらしい事、などは理解できた。

元々は三面六臂さんめんろっぴの辰狐王しんこゆうの像と芳樹の所の神社と隣の寺に関する古文書についての意見なり見解なりを聞かせて欲しいと研究室まで押しかけたのだが「僕は文献史学は専門とちゃうねん。通り一遍の事しかわからんわ」とか、「古文書や神道・仏教がらみなら芳樹自身が考えた方が早いんと違うか？」と言われ、「大学博物館収蔵に伴って問題の古文書を全文読み取れるように撮影した画像」の入ったフロッピーディスクを渡された。芳樹は家伝の古文書を大学博物館に預けている。古文書の安全管理と、学問の世界で何がしかの役に立てば家に死蔵しているより有意義だと考えての事だった。

「芳樹は靈感も有るやんか」

「まあな」

「そういうものは、学会では口にしただけで爪弾きやけど、芳樹のは本物やと思うで」

この教授となった同級生自身も以前、悪霊の魔の手から救われた事が有り、芳樹の特殊能力の確かさを認識していたのだ。

考古学的な事なら、全面的に協力すると言う約束を取り付け、芳樹は大学を出た。

「二匹の龍の、それも金銀の龍の姿が刻まれた鏡かいな…… 金銀の龍って……まさか……にしてもなんで、ギリシャ神話のケーリュ

ケイオンの格好に絡まってんねん……」

芳樹はぶつぶつ独り言を口走りながら、大学のキャンパスを突っ切って、正門に向かっていた、とそこへ、急に肩をたたいた人物がいた。

「芳樹さん、桜丸山古墳について、興味深いことが分かったようですね」

「おおっ、びっくりした……マークさんかいな」

目の前に「異世界の龍の器」だと名乗ったマークがにこやかな表情で立っていた。

「ケーリユケイオンがどうしたのです？……なるほど」

「どうやら、すぐに思考を読み取られたらしい。これでは隠し事なぞ出来はしない、と芳樹は思った。

「思考をブロックする方法も有るのですよ。すみません。芳樹さんはまっすぐな方で、とても思考が読みやすいので、つい、と言いますか、読まないようにする方が難しかったりします」

マークは、少しすまなさそうな顔つきになった。

「ケーリユケイオンと言えば、これをご覧ください」

いきなり、何も無いように見える虚空から、大ぶりの剣、それも西洋風の剣を掴み取って、芳樹に見せた。

「この鞘の模様なのですが、僕が知る限りつい最近浮き出てきたのです」

「まさに……」

金と銀の龍が、ケーリユケイオンの二匹の蛇と同じ形で絡み合っている。

「これは僕が今皇帝をやっている世界の宝剣です」

「不思議な強い波動が感じられますね」

「こいつは自分で空を飛んで移動するのです。そして持ち主を強い

力で守護するとされています」

鞘の模様を芳樹が確認し、マークに剣を返すと、マークは一瞬でどこかに剣を隠した、あるいはしまったようだった。

「あちらの世界なら、帯剣していても自然なのですが、日本では銃刀法違反だと言われちゃいますからね」

「地球に居る間も、さっきの様に必要とあればいつでも手になさることができるとすね」

「そうですね。妻もこれと対だとされる剣を持っています。そして妻の剣の鞘にも同じ模様が出てきました」

マークの剣も、フェリシアの剣も、同じ模様が出て来たと言うのだ。

「ケールリケイオン、と言う事は、日本から見てうんと西の方と何か関係が有るんでしょうかねえ」

「僕が今いる世界の開祖皇帝は地球人で、恐らくは日本よりうんと西の地域の出身だったと僕は推測しています。先ほどの剣はもともとは、開祖皇帝の愛剣だったらしいのです。不老不死で、自分一人の体に金銀二匹の龍を受け入れることができたと言いますが、結局何がどうなったものやら、行方が知れません。記録も無いのです」

「マークさんは……桜丸山古墳が、何かその開祖さんに関係してるとお考えなんですか？」

「ええ。そう考えるのが自然な気がします」

マークは宮龍生の力を借りて、桜丸山古墳の奇妙な波動について探りを入れた話をした。

「ほお……龍生君の波動が、あの場所の奇妙な波動と馴染み、互いに増幅したのですか」

「ええ。龍生君の波動は、あの場所に受け入れられたと感じました。

あの時僕と龍生君が見た血みどろの惨劇を引き起こしたのは、かつての祟り神、つまり今のおキツネ様ではないかと感じたのですが、あの血みどろの惨劇を押しとどめた強い波動は……強いて言うなら……僕自身の波動に似ています」

「つまり、マークさんは、あの古墳の被葬者が開祖皇帝自身か、生まれ変わりか、そんなものではないかと考えられたんですか？」

「そうですね、そこまではっきり断定できませんが、少なくとも魂の波動が似ているのは確実ですから」

芳樹には、このマークと名乗る神出鬼没の謎の人物の言う事が真実を突いている……と感じられたのだった。

「ふううん、名所図絵って、江戸時代の旅行ガイドブックみたいなもんですか？」

龍生は弘樹と弘樹の父・芳樹と三人で、地元の中央図書館で地域の伝承や言い伝えに関する文献を探していた。

「まあ、そうやな。安永9年の『都名所図会』の刊行を皮切りに、各地のものが出来るんやけど、現在の大阪府にあたるエリアはみんなかなり早いで。ここらの四十年後になって、やっと『江戸名所図会』が刊行されたんや」

「これは、復刻本ですか？」

「そうやな。昭和の一けたに復刻してくれはった方々のおかげで、こうして僕らも目にする事が出来る訳や」

昨夜弘樹はネット上のデータベースを調べてみたが、大阪界限のものはわずかしが見当たらなかつたそうだ。

「京都と東京が優先やな」

生まれてこの方、ずっとこの町で暮らし、地元びいきの気持ちが強い弘樹は不満そうだった。

「まあ、確かにここらあたりに観光目的で来はる方なんて、珍しいやろな」

神主の資格を取るために二度目の大学生活を東京で送った芳樹は、弘樹より反応はクールだった。

「さすがに地元だけあって、全九巻そろえてるんですね。しかもここら辺の事が乗っている第六巻も、ばっちりありますやん」

「おお、龍生君、それや。そこに双子山に関する伝承、あるいは怪事件の風聞、そないなもんがあるとええなと思ったんやけどな」

「これ、どない？」

弘樹が指し示した個所に、こんな記述があった。

双子山の狐精

双子山は二つの丸き山の形にて、白銀丸山、黄金丸山とも言へり。古き世の皇子の陵みかどとも古の功臣の御墓とも。由縁詳ならず。御墓の前のたひらなる所にいつのころよりか小さき祠有り。近年靈験昌んなる金銀一对の狐精現れたりとの風聞これ有り。人々、稲荷の使いならんと噂す。

「二匹の狐の噂は僕、子供時分に聞いた事あるで。江戸時代にもう噂になつとつたんか。せやけど……金銀一对……ふうむ」

「発掘したとか、遺跡やとか、そんな教育委員会の立札も無いやん、なあ、龍生」

「確かに、あそこは柵も何も無いなあ」

「土地の所有は、どうなつとつたかな、法務局に閲覧に行かんと……」

「あの、双子山、誰の所有なん？」

「ここらの大地主やった家のおばあさんが相続しはつたのは、聞いた記憶が有るんやけど、そのおばあさん、ずいぶん前に亡くならはつた筈や」

「なら、だれが持つてんのやろ？」

「だから、それを調べに行くのやないか」

「桜丸山古墳のことも一応調べた方が良いでしょうね」

「そうやな。うっかり忘れるところやった、おおきに龍生君」

またひとしきり、みなで手分けして調べたが、弘樹が声を上げた
「これやないか？ こないな話、僕は初めてや」

桜大塚

丸き小山の形にて桜の名所なり。日本武尊やまとたけるのみことの陵とも、その御子の御墓とも古き口伝に言ふ。人々が願えば雨を呼び、良き実りを齎し、皆々尊崇しけり。鎌倉殿の世に一人の強欲なる長者の御墓を暴き殿つ事ありて後、靈験も失せにけりとかや。件の長者は雷に打たれ死にけるとか。たびたび金銀の龍見ゆ、との風聞有り。

「鎌倉時代に盗掘を受けた、っていう発掘報告書の調査結果と一致するんですね」

「ほんまやな。ヤマトタケルノミコトは無いやろうけど、どなた様か凄方のお墓なんやろう」

「金銀の龍見ゆ、って言うのは、江戸時代の人が見たって事やろうか？」

弘樹は今はその様な噂は聞かないので、奇妙に感じたらしい。
「風聞有り、やから、現在進行形やな」

龍生はその長者なる人物が実在の人物だったとして、何を手に入れたかったのかが知りたかった。

「ホンマに、墓に何が有ったんやろうな？ それとも目算違いやっ
たかな？」

芳樹も龍生と同じ点が気になるようだ。

法務局の支所で土地台帳を閲覧してわかったのは、現在双子山は某カード会社が所有していると言う事だった。

「この会社って会長が変な死に方をして、つぶれる寸前まで行った所じゃないですか？」

「おお、そうやな。あの会社、今は外資に買い取られて、首脳陣も総入れ替え……ニュー入出てたわ」

芳樹が車を運転して帰る道すがら、二人の中学生に語ったのはこんな因縁話だった。

「僕は直接には知らんのやけどな、あの会長はこのあたりの生まれの人やったねん。それが、亡くなる直前夢にうなされとったそうや。このあたりまでは、週刊誌にも出とったな。問題はその先や。あの会長にじかにお祓いを頼まれた神主があるんや。そいつ、会長が大邸宅を立てた阪神間の御屋敷町の辺りの、結構大きな神社の息子やねん。大学時代、僕とは東京で同じ下宿におった仲やから、まんざら知らん仲でもない。そいつが言うには、会長は金銀の狐にうなされとったんやと。邸で通り一遍のお祓いはしたそうやけど、効き目無かつたらしいわ。そいつ、靈感無いねん。勉強はようでけたんやけどな」

「それで、今から、双子山に行きます？」

「そうやなあ、その方が話が早そうや。僕もそこそこ靈感は有るけど、マークさんの話しぶりやと、龍生君の力は強いみたいやからな」

「金銀のおキツネが、出てくるやろうか？」

「弘樹の言う様に、スムーズに事が運べば、万々歳やけどな」

「おキツネ様が捜している、宝珠そのものなんか、違うんか、それだけでも知りたいですね」

「それがわかれば、ミッション・クリアは近そうやけどな」

芳樹の車は、隣り合う二つの古墳の間の小道に止まった。三人はとりあえず車を降りたのだったが……

「なあ、噂をすれば影やない？」

弘樹が指差した方角に、ヒョイヒョイひょうきんな動きで虚空を飛び回る小さな金銀の狐が居た。

えらいじつちや・6 (前書き)

これは本当にえらいことかも？

えらいじつちゃ・6

「せやけど、えらい小さいおキツネ様やな。チワワ並みのサイズや無いか」

「金と銀で、動きがヒヨヒヨイおもろいな。女子が見たら黄色い声で『きゃあ、かわいいい！』って叫ぶんとちゃうか？」

龍生も弘樹も、何やらこうした超常現象と言うか、怪奇現象と言うか、そうしたものに慣れてしまったようで、いたって冷静だ。すると……

「きゃあああ！ カワイイイ！」と叫ぶ声が聞こえてきた。

「あれ、杏の声や」

やはり、杏の声は龍生にはすぐに認識できるのだった。

「そんな、叫ばん方が、ええんとちゃうか？」

「あれは美穂やんか」

弘樹は美穂が傍にいとわかって、喜んだようだった。

芳樹は落ち行き払って歩いて行き、身もだえしている二人の女子中学生に話しかけた。

「君らも、なんか気になって、来たんか？」

どうやら二人は美穂の家でもある、寺で語り合っていたらしい。

日の力を宿し金色の光を放つのが『日の宝珠』、月の力を宿し銀色の光を放つのが『月の宝珠』、福德の気を湛え大願成就の力を秘めるのが『摩尼宝珠』で、それらの宝珠がキツネや龍の姿に見える事も有ると言う、あのおキツネ様の解説と、美穂の祖父で住職の正

覚が記憶していた「双子山のおキツネ」の噂が関係しているのではないかと思つて様子を見に来たと言つのだ。

「それにしても、俺らに何をどうせいと……」

「ホンマ、龍生君の言つとおり。僕にも話かけてけえへん……何がしたいのやろうな」

「こいつらアホなんや、きつと。なーんも考えてへんのとちゃうか？」

「おい、弘樹！ お前なあ……」

芳樹が息子を注意する間もなく『アホ』と言つ言葉に金と銀のおキツネは、こつちに向かつて飛来して、いきなり弘樹にまぶしい光線を浴びせかけた。

「うわっ！」

弘樹はもんどりうつて倒れた。が、何も異常は無かつた。

「フウ、間にあつた」

なんと虚空からフェリシアを片手に抱えたマークが出てきた。

「一応慌てて、防御魔法をかけたんですよ。効いたみたいですね」

見ると金と銀のチビおキツネが墜落している。手足をヒクつかせて、倒れている。

「芳樹さん、おキツネ様呼びませんか？」

マークの言葉に、芳樹ははっとしたようだ。

「あ？ ああ、祝詞を上げれば良いでしょうかね」

「お願いします」

心願を以て空界蓮来高空の玉野狐の神鏡位を改め神寶を以て七曜九星二十八宿當目星有る程の星私を親しむ家を守護し年月日時災ひ無く夜の守日の守大い成る哉賢成る哉稻荷秘文謹み白す

祝詞が終わると、バチン！ と言う音がして、おキツネ様が、最初に遭遇した時と同じ六畳間ぐらいの巨体で現れた。

「おお、宝珠どもめ、すっかり眼を回しておるな。よしよし」

まさに舌なめずりと言う感じの口つきをしたかと思うと、大口を開けて飲み込もうとした？ ようだったが、チビおキツネ達は急に正気づいたらしく、空へ飛び出し、逃げだす。負けじと大きなおキツネ様が空を飛んで追いかけるが……

「あのチビたち、嫌がってるな、ものすごく」

龍生はおキツネ様はあの金銀のチビたちの正当な主では無いのかもしれない……そんな気がした。

「（僕も龍生の見解に賛成や）」

先ほどのチビおキツネ達の攻撃に肝を冷やしたせいか、弘樹は口に出さない方がよいと感じたのだろう。

「仮にも神であると自称している存在に対しては、否定的な見解を口にするのは危険だと僕も思う」

マークは皆を見渡して言った。

「ダーリン、おキツネさんたちが！」

「おやつ……こんな展開は予想外だ」

「おキツネ様たちがどうなったのですか？」

芳樹が怪訝そうにマークとフェリシアに尋ねた。

「桜丸山古墳の天辺で、大きなおキツネが意識を失って倒れています。金銀のは逃げおおせたようですね」

「では、私達、先に現場に行きます。どうか皆さんも急いでいらしてください」

マークはフェリシアを抱きかかえると、またいきなり消えた。

「ほんま、ウチの車に人間が七人乗れる仕様で良かったわ」

「なんや、セダンがええとかクーペがええとか、この車買う前はお母ちゃんに言うてはったやん」

弘樹の口ぶりからすると、この車は芳樹の趣味ではないらしい。

「高速での安定性を考えたら、その方がええねんけど、もうめっきり高速も乗らんようになったし、色々人や物を積んで、余り遠くない所を走り来するにはこのほうが便利は便利やな」

芳樹は全員に安全ベルトをしつかり装着させると、「氣い引き締め、行くで」とアクセルを踏んだ。

距離にして、大した距離ではないのだが、道の接続具合が案外と悪くて、桜丸山古墳に行こうとすると、結構大回りして時間を食った。込み合う車で、余り早く進めない。かれこれ十五分ほど車に乗っただろうか、ようやく中学の校舎が見えてきた。

「あんたら、先降りて、桜丸山古墳に急いでや」

芳樹は車を止める場所を探さなければいけないようだった。降りされた中学生四人は走って古墳を目指した。

真つ先に龍生が目指す天辺に辿り着くと、マークとフェリシアが居たが、おキツネ様の姿は無かった。

「どこにいったんでしょうか、おキツネ様たちは」

殺気立った龍生の問いに対するマークの答えは、穏やかな調子だ

った。

「ここだよ。この金と銀の小さな宝珠がああ小さなキツネたち。おキツネ様は、この少しばかり赤いまだら模様が入った褐色の大きな玉だ。こっちの方は随分と穢れが大きい。これで仮にも神様をやっていたなんて、信じがたいよ。ここには無いもう一つの宝珠の力のおかげなのかも知れないが……」

車を止め終わって、ようやくやってきた芳樹にマークがした説明はこうだった。

「おキツネ様は元々の祟り神であった頃の穢れを清め切れずいたようです。更に新たな穢れを帯びたようです。小さな宝珠たちは穢れを嫌って、おキツネ様から離れたようです。金銀の宝珠とおキツネ様を繋ぎ合わせるといっか、融合させるものがどうやら色らしき色は無いと言う『摩尼宝珠』らしいです」

芳樹は静かな表情でマークの説明を聞いているが、龍生は腹が立つてきた。肝心の部分を見せないで、勝手に事を進めてしまった……おキツネ様は本来は芳樹の守備範囲だろうに……出しゃばり過ぎだと思った。

「あんだ、何をしたんですか？ おキツネ様がこんな丸い玉になってしまっつて……よほど苛めたんですか？」

「苛めたといえば、苛めたことになるかな」

その言葉に皆は色めきたった。

えらいじつちゃ・7

「それにしても依頼主が玉になってしもうたんかいな。ややこしい話やな」

三個の玉と言うか宝玉と言うかを前にして、美穂の祖父・正覚は驚いていた。

桜大塚を離れて、皆で打ち揃って、正覚のいる寺まで出向いて、今後の事を話し合う事になったのだが、なぜか誰もマークに事情を尋ねない。得体の知れない大きな力の持ち主だと思つと、声をかけにくいのだろうか……と龍生は思つた。

「なあ、芳樹さん、どないしはる気や？ お宅の神さん居てはらんようになつてもうたで」

「いやあ、大丈夫ですわ、たぶん」

「たぶん？」

大覚は怪訝な顔をした。芳樹の答は確かに意味不明だと、龍生も思つた。

「本来は伊勢の外宮の御祭神である豊受大御神とようけのおおみかみをお祀りしていたはずなんですわ。まあ、元々がお稲荷と縁の深い神様やからなあ。いところからか、あの、おキツネ様が主な御祭神扱いになつたと言うか、すり替わつた様ですねん」

「すり替わつた？」

「豊受大御神様とようけのおおみかみは古い昔からの、この日本の本の神様ですねん。イザナミノミコトのおしっこから生まれたワクムスビと仰る神さんの娘さん言う事になってます。おキツネ様はどこか外国から来た祟り神さんで、茶枳尼天さんかその眷属かようわかりませんが、ともかく血の穢れを気にせえへん神様なのは確かですわ」

「イザナミつて黄泉の国の女神ですわ？」

「そつやな、腐乱した体を現世から追いかけてきた夫であるイザナギノミコトがご覧になって、恥をかいたとお怒りになり、黄泉比良坂^{きか}で離婚されたんやな」

排泄物と血、性質は違うが穢れと言えば穢れの様に龍生には思えた。

「すり替わりやすい条件が有った言う事ですね」

「そつやなあ、どちらも割合と穢れとされれているものと密接な関係が有る神様やな」

考え込んでいる芳樹に向かって、マークがこともなげに言った。

「この金と銀の宝珠は、芳樹さんが預けられたらいかがでしょうか？」

マークが何がしかの行動を取った結果、この事態なのに、何をのんきな声で言っているんだかと龍生はムツとしたが、芳樹も大覚も何も言わないので黙っている。それにしても……先ほど口走った「苛めたと言えば苛めた」と言う言葉は、具体的にどのような行動を示すのだろうか？

「一体何をしたら、おキツネ様達がこんな状態になってしまったんですか？」

芳樹も不思議だったらしい。

「金銀のキツネは、おキツネ様に取り込まれることを激しく拒否していました。あんなに穢れたものの中に取り込まれたくないという意思をハッキリ伝えて来たのです。それでも強引におキツネ様が飲み込もうとするので、説得を試みたのですが聞く耳を持たない。押し止めるために僕とフェリシアの気を少し放ったら、いきなり玉に

なってしまったんです。すると、それと同時に金銀のキツネも宝珠に戻った……と言つ具合です」

「マークさんは、何で僕が宝珠を持ったほうが良いとお考えなのですか？ それほどの神気をお持ちならマークさんが保管される方が妥当ではないですか？」

その芳樹の言葉に龍生も弘樹も頷く。

「僕の神気は攻撃的ですが、芳樹さんの神気は強いのに穏やかですからこの小さなキツネ達も安心でしょう。それに、僕が玉にしてしまったので、ついからですから穢れを浄化してきましょう」

マークが言うには異世界の神域に非常に強い浄化作用のある霊泉が有り、そこに沈めれば清められるとの事だった。

「確かに、清められたら、金銀のおキツネも嫌がらないでしょうね……わかりました。僕が預かります」

芳樹は金・銀の宝珠を受け取った。

「ねえ、金剛石って言うかダイヤモンドみたいな宝珠はどこなんでしょう？」

杏が疑問を口にする、美穂も同様な疑問は感じていたようだ。

「そうそう、私もどうなっているのか気になるわあ」

「それにしても……摩尼宝珠も揃わんと、あかんのやるうなあ……」
考え込む芳樹に向かって、マークが思いもよらぬことを言った。

「金・銀の宝珠やこの大きなおキツネ様の記憶から感じられる摩尼宝珠の波動ですが、僕が長年探している探している存在と関係がありそうです」

「この剣ですが……」

マークは芳樹に以前見せた剣を、また、虚空から取り出して皆に

見せた。そして今度は抜き放って見せた。

「僕が今いる世界の最初の皇帝、開祖に当たる人物の愛剣でした。剣が記憶しているその開祖の波動と、摩尼宝珠の波動が、良く似ているのです」

「ひよつとしたら、その波動ってマークさんのものと、似てたりしませんか？」

「さすが、芳樹さんは良い所を突いていらっしやる。ですが、僕の放つ波動では、大事な要素が欠けているようです。そこで……フェリシア」

「はい」

フェリシアも虚空から剣を取り出して、抜き放った。

「わああ……綺麗な剣」

杏は感嘆の声を上げた。

「これは後の剣とされているものなのよ」
フェリシアの言葉からすると、女性用の剣と言っことらしい。

「皆さん、これを御覧下さい」

マークとフェリシアは、抜き放った剣の刀身同士を交差させた。すると、色の無い強い光が生じた。

「この光の波動が、金銀のおキツネが慕い、大きなおキツネを封じた存在のものと実に良く似ています」

「ふうふうむ。ご夫婦の剣の波動が合わさるとお宅の開祖さんの波動とほぼ一致する、そう言う事ですか」

芳樹があごに手を当てて、深く頷くと、今度は正覚が質問した。

「と言う事は、あれかいな、昔々にマークさんのいてはる所の開祖さんはこの日本においでになって、祟り神さんを封じて従わせた……そないな話になるんですかな？」

マークは大きく頷いて、こう言った。

「ええ、以前伺ったお話の『どこからとも無く現れた名も知らぬ強い神力の神様』の正体が開祖皇帝なのではないかと……そんな風に今は考えています」

輝きを放つ一対の剣は美しい。異世界の宝剣といった存在なのだろう。

「刀身が黒い剣なんですね。黒なのに輝いている……」

ふと龍生はマークが持つその剣から、どこか懐かしいような気配を感じていた。

えらいこっちゃ・7 (後書き)

現在アルファポリスの青春小説大賞が行われています
この作品で参加しております。

こちらから、黄色いバナーを押して飛んでいただき、
一票投じていただけると大変ありがたいです。

杏の中間試験の成績はいつもと同様、中の下と言う出来栄えだった。

「頑張ったのに、成績が上がらんもんやねえ」

思わず杏は溜息をついた。

「もう、そんな辛気くさい話やめて、ランチ！ な？ 食べよ」

そう言うクラスメートも杏と同じ程度の成績だった。

中学校での昼食は、普通それぞれクラスの同性の友達と食べるのだが、その後は部活の練習だったり図書室に行ったり、校庭や体育館でバスケットやサッカーを軽くやったりするものもある。杏は龍生と約束をするわけでは無いのだが、食後同級生が部活の用事に出かけた後は、何となく桜丸山古墳と言うか桜大塚と言うか、その麓の芝生を貼った辺りに行って、話し込む事が多い。

そう言えば「古墳の名前としては桜丸山古墳で、住所は桜大塚」と龍生に教えてもらうまで、どちらが正しいんだろうと、チラッと疑問には思ったが、調べた事も無かった。疑問を解決するのに手間を惜しまず、すぐに調べる龍生と自分では大違いだ。いつも龍生に聞けば何とかなると思って頼りきり、と言う有様のままでは、勉強だって出来ないままかもしれない。そんな気もする。

だが、杏の沈んでいた気分も、龍生の姿を目にした途端、浮上した。

「何となく杏が来てくれそうな気がしたねん」

杏も龍生が待っていてくれるような気がしたから、急いだのだ。

「以心伝心やねえ。なんや嬉しい」

すると、龍生は何とも言えず優しい表情で、杏に微笑む。同じ高校に入る事が出来たら、一緒に過ごせる時間も余り減らさずに済むだろう。一緒に昼に弁当だって食べられるだろうし。だが……同じ高校に行けないと、こんな龍生の顔を見る機会も大幅に減ってしまう。そんな事を思うと、一度浮上した気分がまた沈んだ。

「龍生に弁当作りたいんやけどな……」

「へえ、それは嬉しいけど、ここの学校はスクールランチを頼むのが、半分以上やな。せやけど高校に行ったら弁当が普通やろ？」

「そうみたい。上に高校生の兄ちゃん、姉ちゃんがいてる子は、みんな弁当」

「高校生になったら、弁当一緒に食べたいもんやけど……」

「でもそれ、龍生とおんなじ高校に入学せんとあかんなあ」

「特進コースのある私学にすれば、一緒の高校行けるのとちゃうか？ 弘樹は美穂とそないな方法で、同じ高校に行こうと考えてるのやて」

確かに、美穂は自分より更に成績が悪かったりする。公立なら弘樹と同じ高校は無理だろう。私学の中には成績優秀者は学費免除で、有名大学への受験を目指すコースを特別に設けている所も多い。

「龍生が特進コースで、私が普通コース……そんなら有り得るかな……でも、そうになると、大学はやっぱりさすがにバラバラやねえ」
「なら、一緒に東京に出て隣同士の部屋借りるとか、逆に自宅から通える大学に決めるとか。うーん……杏の親父さん、下宿はアカン言わはるやるなあ」

父親は「大阪・神戸と京都で用は足りるはずや」と常々言ってい

るので、恐らく東京には出してもらえない。母親が「東京は下宿代が高いから、うちじゃ無理」とも言っていたし。

「龍生は京都まで通うん？」

京都の超難関の国立大学も、龍生なら楽に狙えるとは、教師達の間で定着した評価のようだ。

「親父と同じ大阪の大学で構わん。ちょうど俺がやってみたい分野の世界的な研究者の先生もいてはるし」

龍生の父と杏の父が共に学んだ大学の工学系は、世界的な業績をあげている卒業生も多いそうだ。龍生は理科系らしいから、本気で構わないのかもしれない。杏はちよつと安心した。

「そんなら、私はその近所の私学には入れんかなあ……」

「杏の親戚が何人か通ってる所？」

「うん」

「あそこ、今ではなかなか難しいねんで。もっと勉強せんとアカン」
「わかってる！」

龍生は今回学年トップだった。それに追いつくのはとても無理だが……同じ高校に行きたい。

「ああ、そつや。肝心な事言っの忘れ取った」

「何？」

「弘樹の家で、美穂も一緒に勉強会をするんやて。杏も一緒に、どない？ 先生役は弘樹の親父さんや」

弘樹の父・芳樹は神主だが、高校の英語の教員でもあつて、国語の教員の資格も有るらしい。弘樹は出来るから勉強会の必要性は余り無いが、さほど成績の良くない美穂と、同じ高校に入るためにやるのだろう。

「数学は俺が教えたる」

芳樹も弘樹も文系なので、数学や理科に強い龍生が居た方が都合が良いのだ。

今日の学校帰りに早速始めるらしい。四人揃って、帰宅部なので、時間もそろえやすいだろう。

空は抜けるように青い。もうすぐ冬を迎える所為か、空気の透明度が高い気がする。寒いのは好きではないが、隣の龍生の気配を、より一層暖かく身近なものに感じるには悪くは無いかもしれない。そんな風に杏は感じた。

「勉強もやけどな、弘樹の親父さんに聞いて欲しい事も有るンヤ。

どうも、あのマークさんたちと別れた日以来、変な夢をみるんやわ」

「どないな夢なん？」

「俺がな、カボチャパンツとは行かんけど、結構フリルやらなんやらついた装飾過剰な服を着てんねん。場所はどこぞの大邸宅か城みたいな所の部屋で、暖炉の前に寝椅子かなんか置いてあって、そこでウトウトしていると胸が締め付けられるように苦しくなって、腹から喉にかけてメチャメチャ痛むねん。激しく咳き込むと、仰山血を吐いてるんやわ。その血を見て、何時自分が死ぬんやろう……と漠然と考える……そんな夢やった」

「他に、覚えてる事無いん？」

「そうやなあ……どうも杏そっくりの顔の女の子に会いたいって思ってるみたいやった」

「私、そっくり？」

「うん。その子を抱きしめて、キスしたい、そんな事考えてるみたいやった。他にはなんも思い出せんけど……夢の中の感覚や感情の動きが、妙にリアルやねん」

「やっぱり、それって過去生とか前世とかを夢に見てるんかな？」
「そうなんやろうな……こんなん、初めてやで」

因縁めいた夢だけに芳樹に相談したいと言う龍生の話は、杏にも
頷ける。

「何で、私は龍生の夢を見んのかなあ……」

こないに龍生を好きなのになあ……と言う言葉は、さすがに口には
出来ない杏なのであった。

下校後、そのまま弘樹の家で勉強会をはじめると、やがて芳樹が職場から戻る。それぞれの家には電話で連絡を入れ、勉強会が終わったら芳樹が責任をもって家に送るといふ事になっている。

「おじさん、ホンマにお世話になります」

「うちの親からも、よろしく申し上げてくれと言っていました」

「これから、よろしくお願いいたします」

中学生たちが折り目正しく挨拶するのを芳樹は好もしいげな表情で見えていたが、余り大仰な事もできないから気楽にやってほしいと言った。

「金と銀の玉、何や光が強くなつたらん？」

弘樹の言葉で、神棚に乗った金銀二つの宝珠に皆の視線が向けられる。

「職場では、おとなしゅうポケットに納まっとなのやけど、鳥居を潜った途端飛び出すねん」

そう言えば部屋に入ってくる芳樹より少し先に勝手に飛んできて部屋の神棚に納まった。それを見ても四人の中学生はもうこんな現象も慣れっことで、騒がなかった。

芳樹の話では、金と銀の小さなおキツネ様は小さな玉になった後、芳樹の後をくつついて離れないらしい。夜寝る時も、枕の右側と左側に居るそうだ。

「食事のときは膝のあたりにおるし、風呂までついて来るんやで」

「何だか良くなつた子犬か子猫みたいですね！ 良いなあ、かわいいなあ」

杏は心底羨ましそうだ。すると「かわいい」と言う言葉に反応したのか、二つの宝珠は左右に小さく揺れた。

「ほんま、おもろいなあ」

「この子達、ほんまにおじさんが大好きなんですね」

美穂は感心していた。確かに芳樹は柔らかく穏やかで明るい雰囲気をもとまってる。これが「気」と言うものなのだろうか。龍生は思う。人外のものとは言え、これほど好かれるのも芳樹の徳なのだろう。

勉強会が済んで、女子二人を送り終えた後、龍生だけ夕食を御馳走になることになった。

「そうかあ。龍生君のお父さん、海外に行かはるんか」

勤め先の会社が新しく海外に生産拠点を作るそうで、その総責任者となることが決まったらしい。

「はあ。その準備で母も今週は東京です。本当は母も父に付いて行きたいのですが、俺の進学が有るから日本に残る事にしたみたいです。生活費さえあれば、俺一人でも暮らせんことも無いと思うんですが……義務教育も済んでない未成年を置いて行くわけに行かないと言っんです」

「そりゃあ、幾ら君がしつかりしていても、親御さんとしては御心配やろう。……そりゃなあ、この家に下宿するのはどない？」

芳樹からの思わぬ申し入れに龍生は驚いた。

「ああ、それ、工工考えやと思う。僕もそれやったら、色々都好都合や。勉強の教えあいつこもしやすいし」

弘樹はすぐに賛成した。一番面倒をかける事になるであろう母親の百代も「龍生君なら大歓迎」と言う。

「すぐにメールでも入れてお母さんにお知らせした方がええわ」

芳樹は非常に乗り気なようだ。

言われたように龍生は母にメールを送った。すぐに返事が来て、それから田辺家の人々と龍生の母との電話でのやり取りが続いた。「……かまいません。日付の変わらんうちは、みな起きておりますんで」

どうやら、母親は芳樹の申し入れをありがたく受け入れたようだったが、最終的には父親と話し合って結論を出したいと言う事だろう。

かなり遅くなったので、龍生は帰宅する事にした。送って行くという芳樹の申し入れを断って、自分一人で社宅に戻る。芳樹が神主を務める神社とは目と鼻の先に建っている役職者用の社宅は、これまで住んでいた小さな平社員でも入れるタイプの倍の広さだ。この社宅に入って、生まれて初めて龍生も自分用の個室というものを貰ったのだった。決して広くはないが、龍生は結構気に入っている。「もうすぐ、引っ越す事になるかなあ……」

田辺家に下宿するのは楽しそうだが、勝手気ままは出来ないだろう。自分一人だからと言って、だらけた生活を送るつもりは全く無いのだが……。風呂に入れば、風呂掃除も洗濯もちゃんとやってみようし、冷蔵庫の在庫だつて意識して整理しようと考える。面倒といえは面倒なのかもしれないが、龍生はそういう仕事がかなり好きなのだった。

「へええ、結構家庭的なんだなあ」

いきなりマークが玄関から現れた。靴を置いて来たらしい。

「しばらく静かだったのに、今日は何の用です？」

あの玉をマークたちが持って行ってこの方、半月近く平和だったのだ。

「そんな迷惑そうな顔をするなよ」

龍生はあからさまに迷惑な顔をした自覚は無かったが、そんな風に見えたらしい。異世界で皇帝をやっていると言うこのマークと言う男を、一体どこまで信じたら良いのか、まだ自分の中ではつきりしていないと言う事が関係しているのかもしれない。嫌いと言う訳では無いのだが、何となく信用しきれない物を感じてしまう。ウソをついているとは思わないのに、どこか胡散臭い、担がれている、そんな感じがしてしまうのだ。

龍生は沈黙していた。案の定、マークは勝手に話し始める

「あの大きなおキツネ様だった玉、完全な浄化にはしばらくかかりそうだ。でも片手で勘定できる程度の年数で、終わるはずだよ。そうなれば、また状況が変わるかもしれないな」

「金銀の宝珠は、弘樹の親父さんにくつついて回ってますが、あれは、どうしてなんでしょう?」

「芳樹さんの波動は澄み切って美しく強い。あの小さなおキツネ達には魅力的なんだろうよ」

「状況が変わるって、何が変わるんですか?」

「正直言って、具体的に何がどうなるかわからん。わからんが、変わると思う」

「なんすかあ、それ! 訳わかんねえ」

人の家にノコノコと、それも、この男の言う通りなら異世界から御苦労にもやって来て、何を言ってるのかとちよつと腹が立ち、思わず大阪ではあまり使わないようなとんがったアクセントで叫んでしまった。叫んでしまったから、龍生は少しきまり悪くなった。

「確かななあ。だが、君、芳樹さんの所に下宿するんだろ?」

「まだ、決まってませんよ」

「決まるさ。間違いない」

「それは間違いないんですか？」

「ああ。君の御両親が菓子折りの一つも持って、今週末にでも挨拶なさるだろうよ。」

「なんでまた、そう、自信満々なんですか？」

自分の親の事なのに、なぜこの男にこうもハッキリと決めつけられないといけないんだろう。妙に腹立たしい。

「いや、事実そうなるだろうからさ。分かった。また別の機会に話すよ。」

「用が有るから来たんでしょ？　そういう態度、気分良くないです。」

「君には気分が良くも無い話だろうからさ。またにする。じゃあね。」

来る時も勝手だが、帰る時も勝手だ。なんだよ！　そんな悪態をついつきたくなった龍生であった。

「杏の成績でも入学できそうな公立高校の一つや二つ、有るやないか、学費のこと考えてくれ」

杏の父親である高志は学資を負担しなければいけない私立は、絶対反対らしい。

「でも、私立もずいぶん補助金が出るから昔よりずっと楽よ」
母親は受け入れてやった方が、よいと思っっているらしい。

「龍生君や弘樹君の成績ならあの学校の特進コースやる？ 確かに学費はかからへんのやろうけど、杏は普通の成績で普通のコースやで…… 授業のレベルは低いわ、金はかかるわ、エエとこ無いやないか。それに、何かあそこの部活で全国的に活躍したいとか言う訳でも無いんやろ」

金の話をされてしまえば、杏には何ともならないのだった。

「別に高校がちごうてもホンマに将来結婚する気なら、別に大したこと無いやないか。授業の無い日に約束しておうたらええやん。それで十分やと思うけどなあ」

杏はまだ、焦らなくても良い様な気がしていた。勉強会の参加まで禁止されたわけではないし、父が通えば良いと考えている家から二番目に近い公立高校は、自転車で十数分かそこらの距離だ。

「家から近いってことは、何かと安心だわ」
そう言う母の言い分も分からないではない。だが……そうなることやはり龍生と同じ高校には通えないだろう。

「まさか……龍生にあの高校に一緒に行くことは、言えんしなあ」

翌日、その話を龍生にすると、龍生は意外な事を言った。

「なら、あそこに行ってもええやんか」

杏の成績でも入れるレベルの決して高くない公立に行っても構わ

ない、と言うのだ。

「大学入試に合格したら、それで十分目的は果たせるんやから。全国的な模擬試験で、危なげのない成績を取れるように、いつも気を付けとつたらええだけの事や」

帰宅後、また、弘樹の家で集合して、勉強したわけだが、芳樹はまた違う提案をした。

「杏ちゃんのお父さんのいわはる事もわかるなあ。それやったら、家から一番近い公立にしたら一番文句は無いんと違うか？」

「一番近いって、桜大塚高校？ 私も恐らく杏ちゃんも無理やと思いますけど……」

美穂は自分や杏が、そんな成績に到達できるとは思えないようだった。桜大塚高校は、龍生や弘樹の成績程よく無くても入学可能だが、中学での成績が上位三割以内に居ないと難しいとされる、かなり難しい高校だ。

「美穂ちゃんも杏ちゃんも、かなり伸び代がある状態やと僕は思う。ともかく、まだ一年生の段階ではあんまり低いレベルに目標を定めてもうたら、だらけてしまう。今は高めの目標を掲げて、勉強したらエエと思うで」

「そうや。僕もそう思うわ。勉強してへんかっただけで、頭が悪いのんとちゃうと思うもん」

弘樹の言い方は無遠慮と言えは無遠慮だが、美穂や自分の頭は悪くないと思ってくれてはいるらしい。

「桜大塚高校なら、家から歩いてすぐですもんね。そりゃあ、入学出来たらおじさんの仰るように、家の両親は大賛成やと思います」

杏がそういうと、芳樹はうなづいた。

「なら、気分引き締めて、四人で桜大塚入学を目指そうな」

高めの目標を設定したことで、これから気を引き締めて勉強することが出来そうだ。

その日から、杏が一生懸命勉強を始めたので、父などは「ちよつときついかなと思うたんやけど、言うてみるもんやな。これでうまい事、桜大塚に入学出来たら、田辺さんのお宅には足を向けて寝られんな」と言っている。

すると母が意外な事を言った。

「田辺さんの奥さんが仰っていたのだけれど、理系の科目がちよつと苦しいと言う事みたいよ。お父ちゃん、一応数学の教員免許、あるんでしょう？ 土日にお手伝いしたらどうかしら？」

確かに、芳樹は英語と国語、それに社会科全般は十分余裕をもって教えられるが、理数系は自信が無いらしかった。さすがに、中学の教科書レベルの問題は解けるらしいが……

「ああ、それ、ええなあ。田辺のおじさん、ダンディでやさしゅうて、素敵な人やねん。お父ちゃんもエエ刺激受ける、そんな気がする」

「なんや、それ。お父ちゃんはかつこ悪いんか」

「この頃お腹が目立つわあ。田辺のおじさん、身長百八十三センチ、体重七十六キロでジエームス・ボンドとサイズが一緒なんよ。お父ちゃんみたいに、揚げもんパクついてビールを晩酌なんてせえへんねん」

杏が言うつと、母もこう言った。

「お父ちゃん、お風呂上がりのアイスクリームだけでも、やめるべきね」

「企業戦士はストレスたまるねんで。言うたらなんやけど、教員なんかよりずっと激務や」

父は無然とした表情になってきた。

「別に宮のおじさんみたいに、新しいプロジェクトの中心とか言う訳でもないし……」

龍生の父は同期の出世頭で重役会入りも有り得るとは、父が自分で言っていた事なのだが……娘の自分が言つとちよつとキツイかもしれない。

「研究開発の第一線からは引退して、本社の全体業務が今は主なんでしょう？ 昔みたいな泊まり込みだつて、もう何年も無いじゃない」

母の言つよつに、最近は何の様に忙しくは無いようだ。

「ああ、うるさい、うるさい！ 分かった。田辺さんに任せきりにするな、そない言いたいのやろ？」

「ええ、まあ」

「そつやね」

「あちらさんが、御都合の良い時にお声掛けして下さいたら伺います、とでも言つとけ。でも、平日はたぶん無理やで」

すると、その瞬間、見慣れたダイニングキッチンの空気が急に歪んだように感じた。

「へええ、ええ傾向や無いの。高志もきばりや」

「おばあちゃん！」

「お母さん」

フェリシアが目の前に立っていた。なんというか、お姫様みたいなドレスを着ている。

「ああ、この前言つとくのを忘れてたんやわ。高志名義で積み立て

た預金があるねんで。もともとは結婚式の費用に充てるつもりやったけど、手つかずで忘れられてるさかい、通帳のありかを教えておかつんと、な」

なんと、仏壇に隠された引出が付いていて、その中に通帳が入れられていた。聞けば「家に金を入れる」とか「結婚資金を積み立てる」とか言つて、父・高志の初任給からずっと祖母が貯めて来たらしい。両親の結婚式は質素にすませたので、貯めた資金が宙に浮いた……そう言う事の様だ。

「お、お母ちゃん、これ、ほんまに僕の名義なんかいな？」

「そうやで、そのぐらいあったら、杏ちゃんが私立高校に行きたがっても、学資は十二分に出るやろ？」

みんな心配してくれている。頑張らなくてはいけないと、杏は思った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0595o/>

異世界からのお節介

2011年1月22日19時51分発行